
大乱闘! ゲーム & アニメ! 夢の大バトル!

エルド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大乱闘！ ゲーム&アニメ！ 夢の大バトル！

【Nコード】

N 6 5 5 1 F

【作者名】

エルド

【あらすじ】

スマッシュブラザーズを集めた二体の神…。マスターハンドとクレイジーハンドは、様々な世界の強者達を呼んだ…。開催されるのは世界の垣根を超えた夢のバトル！？今、最強を決める戦いが幕を開ける！

プロローグ：始まりは二体の神（前書き）

ふと思いつき、書いてしまいました…！
夢の大バトルの始まりです♪

それでは本編スタート！

プロローグ：始まりは二体の神

「兄貴、手筈は整ったぜ」

「ああ…」

暗く、どこまで続くか分からない空間…。

そこにいるのは人間、ではなかった…。

右手がいた。

白い手袋をした巨大な手袋が。

しかも対として左手がちゃんと存在し、二体とも宙に浮いていた。

「遂に、遂に開催できるのか…！」

手である身体で握り拳を作り出す。

興奮しているのか、ワナワナと震え出した。

「待て弟。手紙はちゃんと送ったな？」

「ああ！ 参加してほしい選手達の世界に、ちゃんとして送ったぜ！」

親指をグッと伸ばすのを見て、ちゃんとやったのだと判断する。

「今頃、彼等はそれを見てどう思うかな…」

「参加してくれば、いいんだけど…」

急に意気消沈になると、二体は待った。
選手が来るのを…。

「これは面白そうですね」

“嵐を呼ぶ五歳児”は、自分に來た手紙を見ながら呟き…。

「ゲロゲロリ。これは出ない手はないであります!」

“侵略者の蛙そっくりの宇宙人”は、目を光らせ…。

「よぉし! 参加するぞお!」

“青きネコ型ロボット”は、出場する事を決意し…。

「へえ〜！ 面白そうじゃねえか！」

“最凶のサイボーグ”は、悪魔の様な笑みを浮かべ…。

「喧嘩だ喧嘩！ 参加するに決まってるあ！」

“自慢の拳を持つ者”は、喧嘩を望み…。

「これは…鍛えるのにいいかもなの」

“管理局の白き魔王”は、女神のように微笑み…。

「自分がどこまで出来るか…試せる」

“幼き見習い魔法使い”は、杖を力強く握りしめ…。

「こいつは面白そうだな〜！ 暇だし参加してみつか！」

“大怪盗の三代目”は、車を止めてほくそ笑み…。

「ふっ…大会か…！ 参加するに決まっている！」

“最強のガンダムファイター”は、楽しげな表情を浮かべ…。

「おお！ 大会なんて久々だぞぉー！」

“地球育ちの最強のサイヤ人”は、喜びの声をあげ…。

「太一達はいないのに、出れるのかな？」

“デジタルの世界で生きるモンスター”は、疑問の声を出し…。

「ピッキッ」

“大魔王をも倒したスライム”は、楽しげにその場を跳ね…。

「クエッッ？」

いまいち手紙を理解していない、“ダンジョンを制覇する黄色い鳥”は読み直し…。

「へえ…まあ、最近ヒマだし、出てみつか！」

“赤毛をせしレプリカ”は、頭をかき…。

「…面白そうだな」

「なになに？」

“異世界の者同士の間に生まれし双子”は、仲良く手紙を見て…。

「ほお…たまには、大会もいいかもな」

“様々な偉業を成し遂げた風来人”は、三度笠を上げ、縞合羽をたなびかせ…。

「ちょうどお金もないし…出てみよう！」

“ディグアウターの少年”は、これを喜び…。

「ハアゝハッハッ！ この俺様が優勝と決まっているわっ！」

“魔界の王”は、自らの勝利を信じて疑わなかった…。

それ以外に送られた者達も、同じく参加の決意を秘めていた…。

「兄貴！ 全員が参加だ！」

選手たちの参加を察した左手が、大声で右手に叫ぶ。
とても嬉しそうに。

「よしっ！ スマッシュブラザーズに連絡！ 開催するぞ！」

慌ただしく動きながら、何かの準備をとり始める。

整ったのか、二体は一斉に指を擦り合わせて鳴らした。

「究極の大乱闘を……！！」

息ピッタリで叫び、二体はこの空間から消えていった。
空間は静寂に包まれた――。

不意に、一枚の手紙がひらりとここに落ちてきた。

そこには、こう書かれていた。

『究極の大乱闘を開催！

様々な世界の強敵達との夢のバトル！

優勝者にはどんな願いも一つだけ叶えさせていただきます！

参加する場合は、この下記に書かれた欄に。を書いて下さい。

自動的に大会の会場へと移動いたします。

奮ってご参加ください！

↓大会主催者“マスターハンド&クレイジーハンド”より↓

世界の垣根を超えた、究極の大乱闘…。

今、それが始まるうとしていた…。

ブログ：始まりは二体の神（後書き）

いかがでしたでしょうか？

アニメとゲームは私の好きな物を選ばせて頂きました。
詳細は次回に書く予定です…よろしければどうぞ♪

ご感想、ご意見をお待ちいたします！

第一話：出場選手の紹介（前書き）

開催される大会。

出場する選手が明らかに…。

第一話：出場選手の紹介

——天空スタジアム

ここは神の集めた勇者達“スマッシュブラザーズ”が日夜戦う場、天空スタジアム。

そこでは今、メンバー達が慌ただしく動いていた。

「…ん」

木の上で寝ていた赤い帽子をかぶった男が目を覚ます。
ご存じ、キノコ王国の英雄“マリオ”だ。

どうやら、物音で眠りから覚めたようだ。

「兄さん！」

「んっ？ “ルイージ”か？ おはよ」

今まで捜していたのか、息切れをする弟にのんきに挨拶をする。

「もうっ！ 何やってたのさ！」

「いや、昼寝してた…」

「だからさっきいなかったのか…」

タメ息をつきながら、マリオに持っていた紙を手渡す。

「？ 何コレ？」

「読めばわかるよ」

『大会参加者・名簿』

「クレヨンしんちゃん」

野原 しんのすけ

アクション仮面

カンタムロボ

ぶりぶりざえもん

「ドラえもん」

ドラえもん

野比 のび太

剛田 武

「ケロロ軍曹」

ケロロ

ギロロ

タママ

ドロロ

「サイボーグクロちゃん」

クロ

ミー

マタタビ

「スクライド」

カズマ

劉鳳

ストレイト・クーガー

「魔法少女リリカルなのはStrikers」

高町 なのは

フェイト・T・ハラオウン

八神 はやて

スバル・ナカジマ

エリオ・モンディアル

「魔法先生ネギま！」

ネギ・スプリング・フィールド

神楽坂 明日菜

桜咲 刹那

犬神 小太郎

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル

「ルパン三世」

ルパン三世

次元 大介

石川 五エ門

銭形 幸一

「機動武闘伝Gガンダム」

ドモン・カッシュ

東方不敗・マスターアジア

「ドラゴンボールZ」

孫 悟空

ベジータ

「デジモンアドベンチャー」

アグモン

レオモン

「スライムもりもりドラゴンクエスト」

スラリン

ミイホン

「チョコボの不思議なダンジョン」

チョコボ

「テイルズ オブ ジアビス」

ルーク・フォン・ファブレ

「サモンナイト4」

ライ

フェア

「風来のシレン」

シレン

「ロックマンDASH」

ロック・ヴォルナット

「魔界戦記ディスガイア」

ラハール

『総勢 46名』

リストには、聞いた事も見た事もない名前がたくさん書かれていた。

「？」

「今回、他の世界の人達を呼んで大きな大会を開くんだって」

そこまで聞いて、マリオは感づいた。

今までにない、大きな大乱闘を開催するのだと。

「…成る程。つまり、これが他の世界の強者達ってわけか」

「うん。でも、凄い人数だよ…」

再びリストを見ながら、マリオブラザーズはゴクリと唾を飲んだ。

「スマブラメンバーを合わせてもかなりの数…その中で、優勝か…」

「む、難しそうだね」

怯えてガタガタと震えるルイージを、マリオは優しく肩に手を置く。

「落ち着け。やれるだけやればいいんだから」

「そうだよ」

ピョンとマリオの頭の上に、星の戦士である“カービィ”が跳び乗

る。

「おわっ！？ カービィ！」

「マリオさんの言う通りですよ」

さらには緑色の服を着たハイラルの勇者“リンク”も頷きながら近づく。

「私達はいつもの通り、全力で戦えばいいんです」

力強い言葉に、ルイーダの怯えは吹っ飛んだ。

「…そうだね。ありがとう」

「いえ」

「どーいたましてえ〜」

「…さっ、他の連中はどうせスタジアムに移動したんだろ？ 行くうぜ」

マリオを先頭に、ゆつくりと彼等は扉へと足を運ぶ。

目指す先は、天空スタジアムのバトルフィールドであった。

歩きながら笑う彼等は、楽しみにしていた。

どんな強敵がいるのか、どんな戦いになるのか…。

ただ、それを期待していた…。

第一話：出場選手の紹介（後書き）

二話め、いかがでしたでしょうか？

知っているアニメとゲームはあったでしょうか？
あったら幸いです♪

次回もお楽しみに！ ご感想をお待ちします。

尚、このキャラ同士を戦わせたい！ というご意見があれば、どうぞ。
なるべく検討させていただきます♪

第二話：第一回戦、スタート！（前書き）

遂に始まる夢の大乱闘！

果たして、第一試合は誰と誰が…！？

第二話：第一回戦、スタート！

——天空スタジアム・バトルフィールド

いつもの戦いの場であるバトルフィールド。

中央には大会に出る選手一同。

更に主催者であるマスターとクレイジーがたたずんでいた。

『それでは！ 大乱闘を開催する！』

「「「「「わあああああああああああああつ！！！！！！」」」」

「

客席から発せられる叫びで、観客の興奮具合がよく分かる。

いつもの倍はいると思いつながら、マスターとクレイジーはマイクを通して説明を開始した。

『それではルール説明をする！ まず勝敗は場外、もしくは気絶で判断する！ 因みに棄権も可だ！』

『二つ目は、試合には武器は何を使っても構わないぜ！』

『そして最後！ この大会では絶対対に！ 死ぬ事はない！ だから存分にやれ！ 以上！』

交互にルール説明を行うと、視線を客席からフィールド上にいる選手達に向ける。

「選手一同には、悔いの残らない戦いを存分にしてほしい！」

マイクを通さないで叫んだ言葉は、いい言葉だった。

しかし声が大きかった為か、耳を塞ぐ者が出たのが残念なところだ。

「それじゃ、第一回戦の第一試合を始める！ 呼ばれた奴はこのままバトルフィールドに！ それ以外は控え室へ行け！」

第一試合の一言で、選手全員に緊張や興奮が走る。

静かにゆっくりと、マスターは選手の紹介と名前を口にした。

「まず最初は！ 赤い帽子にオーバーオールでお馴染みのスマブラリーダー！ マリオ！」

「僕からか……」

「マリオ！ 頑張ってね！」

「兄さんファイトオ！」

「頑張ってください！ ヨッシー！」

周りにいるスマブラメンバーの声援を受け、気を引き締める。

「続いては、裏表ともに性格悪し！ 腹黒さは並じゃないぜ！ タママ！」

「やってやるですう！」

「タママ！ ファイトであります！」

「勝てよ」

「頑張れでござる！」

応援もあつてか、目を血走らせ、血管が浮き上がるまでに拳を作る。その間に他の選手達は、一斉に控え室へと入っていった。

「では両者！ 見合つて！」

「ボコボコにしてやるですう！」

「それはこっちのセリフだ！」

一斉の距離を置き、睨みあう。

すでに両者ともにヤル気は満ち溢れていた。

「では…。始め！」

マスターの言葉と同時に、ゴングの音が鳴り響く！

「タママインパクトオ！」

最初に行動を起こしたのはタママだった。

口に溜めたエネルギーを吐き出し、一直線にマリオを狙う。しかし、ジャンプを得意とする彼に当たる筈がなかった。

「ひょいと！」

あっさりと得意のジャンプでかわし、空中で一回転する。

回転しながら、右手に炎の力を溜めこむ。

「ファイアー、ボールツ！」

着地した瞬間、球と化した炎を投げつける！

地面を跳ねる様に、真っ直ぐにタママへと向かう。

「そんなもんがどおしたあ！ ハイパータママインパクトオツ！！」

頬をさらに風船の様に膨らませ、先程よりも一回り大きなエネルギーを吐きだした！

それは易々とファイアーボールを一瞬で掻き消す。

さらに威力は衰える事無く、進み続ける！

「スーパー……！」

迫りくるエネルギーに対し、冷静にマリオは懷から黄色いマントを取り出す。

闘牛士のようにマントをたなびかせ、エネルギーが迫るまで待つ。

「マントオツ！！」

目の前まできた瞬間、勢いよく振るう！

すると180度に曲がり、反対方向に飛んでいく。

反対——つまり、放った本人であるタママの方向へと。

「タマア！？」

まさか跳ね返すと思っていなかった為か、すぐに動く事が出来なかった。

それが、回避するのが遅れた原因であった。

直撃した瞬間、閃光がほとばしり、爆発がフィールドに生じる。

爆風で帽子が飛ばないよう押さえつつ、マリオは煙が漂う爆心地を見る。

「…タ、タマア……！」

煙が晴れたその先には、埃と傷だらけのタママが膝を震わせていた。しかし瞳には、戦う意思が残されていた。

「ま、まだ……！」

「ファイヤアアアアッ！」

立つ隙を与える前に、マリオはまたも右手に炎を溜めながら駆けだす。

ケリをつけるつもりなのだ。

目と鼻の先までの距離になったと同時に、勢い良く右手を目の前に突き出した！

「掌ッ底……！」

手の中に溜めてあった炎が、まるでダイナマイトの如く爆発した！悲鳴も上げられないまま、タママは身を焦がして吹き飛んでいった

…。

地面に衝突する頃には、意識は完全に無かった。

「…気絶を確認。勝者、マリオ！」

「ふう…」

肩をスツと下ろし、息を吐く。
一気に力が抜けたのだろうか。

「意外と容赦ねえな…」

ぼそりとクレイジーが呟いた事に、誰も気付いてはいなかった。
こうして、記念すべき第一回戦、最初の試合は終わったのだ…。

第二話：第一回戦、スタート！（後書き）

第二話、いかがでしたでしょうか？

今回はルール説明と一試合のみの為に、かなり短めですいません…。しかし、次回は試合を多くする予定ですので楽しみに！

尚、このキャラを戦わせたいという要望も受けております！
それでは、ご感想とご意見をお待ちしております！

第三話：第二試合、第五試合 ゲームとアニメの混合戦（前書き）

前回、遂に始まった大会。

第一試合はマリオの勝利で終わっていた…。

第三話：第二試合、第五試合 ゲームとアニメの混合戦

「では、第二試合を始める！」

観客の歓喜の音が響く中、マスターは選手を呼んだ。

「救い料は一億万円！？ 自称、救いのヒーロー！ ぶりぶりざえもん！」

「自称はいらんわ！ 自称は！」

「正直、パワードスーツ無い方が強いんじゃない！？ サムス！」
「何よその紹介……」

控え室から出てきた二人は、不満そうな表情で指定の場所に立つ。

「構え！」

「……さて、やるとするか」

「豚……まあ、油断しない様にしましょ」

「始め！」

カーンツとゴングの鳴る音と共に、すぐさまサムスは右腕のガンポッドにチャージを開始する。

「ふふふ……この私と戦おうとはな……」

余裕の笑みを浮かべるぶりぶりざえもんを尻目に、無言でエネルギーをチャージし続ける。

「まあいい…喰らえメガトンパンチ！」

左腕を振り上げながら走り出すと、サムスに跳びかかる！
ヒヅメがキラリと光り、左腕で殴りかかる…。

「チャージショットツ！！！」

よりも一步速く、エネルギーが充分に溜まったチャージショットが
撃ち出された！

「ぶひいつ！！？」

避ける間もなく顔面にめり込み、一瞬で大爆発を巻き起こした！

すぐ後に、ロケット並みの速さで吹っ飛んでいったぶりぶりざえもんは、大きな音をたてて壁に激突した！

ヒビが入る壁に突き刺さったまま、動くことはなかった…。

「…ええ…つとお…勝者、サムス」

場外に出た瞬間に、もう勝敗はついていたので判定を出した。
声でブルーなテンションに気付き、クレイジーは近寄った。

「…どしたの兄貴？」

「いや、あっさりと終わっちゃったからさ…」

ガッカリしたと言わんばかりにタメ息をついた。
開場もつられてタメ息をしたのだった…。

「気を取り直して、第三試合だぜ！ 兄貴！」

必死の元気づけに、マスターのテンションはすっかり上がっていた。

「そうだな！ 呼ぶぞー！！ …弱くても頑張れば大魔王に勝てる！
最強のスライム、スラリン！」

「ピッキー！」

「サルだってかなりの科学力を持つてんだぜ！ デイディーコング
！」

「それって、オイラの武器の紹介じゃ…？」

「うっさい！ 黙れ！」

素朴な疑問を黙れと言われ、仕方なく指定の位置につく。

「構え！」

「ピッキー！」

「いくぞお！」

「始め！」

「ピッキー…！」

直後、持ち前であるゴム並みの柔らかい身体を利用して、餅の様に思いきり伸びた！

「ええっ！？」

いきなりの変化に、ディディーは戸惑いを隠せなかった。
無視してスラリンは元に戻る反動を駆使し、体当たりを仕掛ける！

「ぐえっ！！？」

驚いていて回避が遅れたのか、まともに喰らう。
只でさえ軽量なその体が、吹っ飛びの手伝いをしてしまったのだ。

「くっ！ このっ！」

体勢を立て直し、反撃のために取り出したピーナッツ・ポップガンを連射する！

弾丸の落花生は、回転しながら飛来していく。

「ピキッ、ピキッ！ ピッキーツ！」

撃ち出される落花生をピョンピョンと跳ねて、続々とかわしていく。
割れて中身が飛び散るが、気にせず無視する。

「てりゃー！」

意味がないと判断したディディーは、跳んで蹴りの態勢に入り突撃した！

「ピキッ！？」

反射的にスラリンはペチャンコに凹む。

その判断は正しく、蹴りは当たらずにそのまま通り過ぎていった。

これが、最大のチャンスとなった。

「ピイイイイッ！ キーッ！」

またも身体をゴムの様に伸ばす。

しかし今度はすぐに体当たりはせずに、力を溜め蓄える。

力が最大になった為か、身体が虹色の輝きを放ち出す。

「ちえっ！」

振り向いた瞬間、ディディーコングの目に虹色の光が映った。それが自身の腹にぶつかった瞬間、意識は飛んだ…。

「勝者、スラリン！」

「ピッキー」

白目をむいて、ディディーは倒れ込んでいた。

勝利宣言を聞いて、嬉しそうに鳴き、はしゃぎ回るのだった…。

「第四試合！ スラリンの永遠のライバル！ ミイホン！」
「やってやるぜえ！」

「続いては、いくつものダンジョン制覇！ ただの鳥じゃないぜ！
チヨコボ！」
「クエツ！」

元気よく出てきた二匹は、指定の位置に立つ。

「構え！」
「いくぜえ！」
「クエツ？」

それぞれの構えを取り、開始を待つ。

「…始め！」

「喰らえ！」

始まった瞬間、地面を滑りながら触手の一本を突き出す！

「クエエ…！」

一方のチヨコボは右脚を蹴りの状態で固定すると、スッと目を閉じる。

「必殺のミイホンパーン「クエーッ！！」！！？」

目の前まで迫って来た瞬間、チヨコボはカッと目を開いた。待ってましたと言わんばかりに、勢いよく右脚で蹴り飛ばした！

鋭利な三つの爪と驚異の脚力…。

これが合わさり、とてつもない強烈な一撃となったのだ。

あっさり、ミイホンの意識を失わせほどに…。

「勝者、チヨコボ！」

「クエーッ」

羽をバタつかせ、ニッコリと笑いながら鳴いた。

「あれ兄貴？　今回はタメ息つかねえのか？」

「いや、最初程の無様さじゃなかったからさ…」

「…そうだな」

最初の試合を思い出し、クレイジーは納得したのだった…。

「第五試合！ ケロン星の誇り高き軍人！ 赤き蛙の戦士！ ギロ
ロ！」

「カエル言っな！」

「続いて、レプリカだけどそれがどうした！ 強く生きるぜ！ ル
ーク・フォン・ファブレ！」

「よしっ！」

決意を固めると、ルークは愛用の剣をしっかりと握る。

「ギロロオッ！ しっかりやるでありますよぉ！」

「頑張るですう！」

「ファイトでござる！」

「…フン」

一名、包帯で身を包んだケロロ小隊の応援を背に、ギロロは恥ずかしげな表情を見せた。

「構え！」

「相手は剣士…ならば、遠距離か」

「モンスター…ってわけじゃないよな」

指定位置に立ち、相手の外見や武器を互いに確認し合う。

「始め！」

ゴングが鳴った。

「まずはこれで！」

まずは力量を図る為に、マシンガンのトリガーを引く。
銃口から何発もの弾丸が連射され、ルークを襲う！

「てりやあああああつ！！！」

鞘から抜いた剣で、迫る銃弾を次々とはじいていく！
威力をなくし、熱を帯びた空薬莢が、大量に地面へ落ちていった。

「ちっ！」

マシンガンは無駄だと確認すると、ビームライフルを手元に転送する。

トリガーに指をかけ、銃口から赤い光線が発射する！

「おつとつとお！？」

さすがに光線は危険と察したのか、ルークは地面を強く蹴って、前に飛び出す！

直後、背後で爆音と爆風を受けながらも、全速力で走り出す！

「来させるか！」

狙いを定め、マシンガンとビームライフルを一斉に連射する！
当たるのではなく、あくまでも牽制が目的だ。

実弾は剣で弾き、ビームはそのまま走って避ける。
繰り返していく内に、ルークは自身の攻撃範囲にギロロが入った事が分かった。

「喰らえっ！」

懐に一気に跳びこみ、水平に構えた剣で、高速で突きを放つ！

「なんのっ！」

マシンガンを投げ捨て、空いた方の手で背中 of ビームサーベルを抜く。

赤い光の刃が生まれ、すぐに剣先を弾き飛ばす！

「まだまだあ！」

「でえい！」

鋭い刃と光の刃が、何度も交差を繰り返す。
だが剣の腕では、ルークの方が上手だった。

「双牙斬！」

「っ！？」

上下に強く振られた剣に、ビームサーベルの刃は耐える事は出来ず。
しかし強い衝撃に、手は耐えられずに手放してしまう。

「ぐっ！？」

拾う余裕はないと確信し、すぐに背中にあるもう一本を抜こうと手を動かす。

「烈破掌！！！」

だが、顔面に叩き込まれた掌底にそれは阻まれた。
さらに前もって手の平に溜めておいた気が、爆発した。

掌底と爆発の合わさった威力に、さすがのギロロも気絶は免れなかった…。

「勝者、ルーク・フォン・ファブレ！」

「よっしゃあ！！！」

ガッツポーズを取るルークの傍に、顔面が真っ黒に焦げたギロロが
ピクピクと痙攣しながら倒れていた…。

こうして、第五試合までが終了したのだった…。

第三話：第二試合、第五試合 ゲームとアニメの混合戦（後書き）

第二試合、第五試合、いかがでしたでしょうか？
うまく戦いを書けたと思うのですが…。

次回は第六試合から書きたいと思います。
ご感想、ご意見をお待ちします！

このキャラ同士を戦わせたい、というのもどうぞ！

第四話：第六試合、第八試合　アルターの大激闘！（前書き）

第五試合まで終了した大会。
今、第六試合が始まる…！

第四話：第六試合、第八試合　アルターの大激闘！

「第六試合を始めるぞ！　自分の道突き進む！　自慢の拳を持つ男！　カズマ！」

「さあ、喧嘩だ喧嘩！」

「続いて、戦いが殆ど格闘って、ホントに魔法少女？　スバル・ナカジマ！」

「…痛いところ、突かれた」

シヨンボリとしながら、スバルは指定の位置に立つ。
バリアジャケットはとくに装着済みだ。

「スバルー！　がんばってねー！」

「油断しないで！」

「無茶はダメやでー！」

「頑張ってください！」

「みんな…！　よおしっ！」

仲間の応援を受け、俄然やる気がみなぎる。

「構え！」

「全力で倒す！」

「さあ、来やがれ！」

「始めっ！」

突如、フィールドの一部が七虹色の粒子と化す。
それも一ヶ所ではなく、多数の場で。

「えっ？」

さすがにこの事態に、スバルは慌てて周りを見渡す。

虹色の粒子は、右腕を突き出すカズマの元に集まっていた。

次の瞬間、カズマの腕が縦に三等分に割れた。

虹色の霧が金色の縄となり、割れた腕を縛る。

続いて金色の装甲が右腕を覆い、右肩の後ろに三本の赤い羽根が生える。

最後に髪が逆立った。

融合装着型のアルター、“シェルブリッド”が出現したのだった。

『ここで説明！ 今の不思議な現象は、カズマ選手のアルターによるものだ！』

マイクを通して、マスターは今の現象の説明を始めた。

『周囲の物質を分解させて、自分の能力を発生する為に再構成するもの…それがアルターだ！』

この折角の熱弁を、殆どが聞いてはいなかった。
不思議な能力の事よりも、進行する試合を楽しみたいからだ。

「んじゃあいくぜ！ 兄貴譲りの、衝撃の！」

シエルブリッドの装甲が左右に展開される。

同時に、右肩にある一本の羽根が、徐々に霧となって消えていく。

「リボルバー……！」

右手に装着した、相棒である“リボルバーナックル”。

そのナックルスピナーが、車輪のように高速で回転し出す。

「ファーストブリッドォ……！」

完全に羽が消えた途端、そこから緑色の炎が噴きだす。

推進剤と化したそれによって加速したカズマは、拳を突き出した状態に進む！

「シュートオツ……！」

接近に気が付いたスバルは、すかさずリボルバーナックルを打ち出す。

打ち出された拳同士が激突し合い、爆発的な衝撃が巻き起きる！
これによって生じた煙がフィールドに漂いつつある中、煙からスバルが飛び出た！

「撃滅のお！ セカンドブリッドオッ！！」

後を追って煙から飛び出たカズマは、再び加速した状態で追撃をかける。

慌てつつもスバルは冷静に、回避ではなく反撃をとった。

またも拳と拳がぶつかりあう。

再び発生した凄まじい衝撃に、堪らず両者は後方に吹き飛ぶ！

「ちっ！」

舌打ちしながら、カズマは地面にシエルブリッドを打ち、めり込ませる。

埃が舞うのもお構いなしに力づくで減速し、その場で停止する。

「きゃあああああつっ！！！！？」

『Wing Road.』

対するスバルは、それほどの無茶はしなかった。

すぐさま魔法で出来た水色の道、“ウイングロード”を足元に展開する。

この足場に着地し、体制を整えようと動く。

「おおおおおおおつ！！」

しかしいち早く体制を直したカズマは、地面を強く殴る！

反動で身体が舞い、垂直にスバルを狙ってシエルブリッドを構える。

「行くよ、マッハキヤリバー！」

『All right buddy.（はい、相棒）』

空中にいる際にできた隙を、スバルは決して見逃さなかった。

足場から、青い魔法陣が展開される。

それに応じて両手で練り上げた魔力を使い、前方に魔力スフィアを形成する。

更に水色のスフィアを左手で保持、そして。

「デイベインツ！ バスタアアアアッ！！！」

リボルバーナックルを装着した右拳で、思いきり打ち込む。

直後、球体だったスフィアは変化し、青き光の砲撃となって撃ち出された！

「なにいつ！！？」

まさか砲撃が来ると思っていなかったカズマは、迫りくる閃光を避ける事は出来なかった。

…いや、彼はしようとしなかった。

（しゃらくせえ！ この光ごと、テメエに俺の拳を打ち付けてやる！）

思考にはもはや、避けるという考えなどなかった。

「抹殺のお！ ラストブリッドオオオオッ！！！」

最後の羽根が完全に消えると同時に、一気に加速する！
勢いに乗り、青い砲撃を恐れも抱かずに殴りつけた！

「ぐっ…!!!」

「ええええええいつ!!!」

衝突しあいの最中、稲妻と衝撃波が周りに発生し、埃が舞う。

この激突を、観客達は息をのんで見守る。

そして砲撃と打撃——この勝負は、佳境に入る。

「なにっ!？」

突然、シエルブリッドの威力が激減したのだ。

この原因に、カズマはすぐに気が付いた。

（クソツタレ！ 速さが落ちてきてやがる！）

そう、長い膠着状態によって、背中から出ていた推進剤が切れたのだ。

「おおおおおおおっ!!!!!!」

これを好機と判断したスバルは、さらにデイバインバスターを押し出す！

耐えられず、徐々にシエルブリッドの装甲に、亀裂が走っていく。

そして遂に——粉々に砕け散った。

「ぐあああああああっ!!!!!!?」

装甲が剥げ、拳の威力が更に激減した。
この結果、デイバインバスターにあっさりと飲み込まれる事となった。

大きな傷を負い、地面に墜落したカズマを見ても、スバルは戦闘の構えをとり続けた。

何となく彼女には分かった。
彼はまだ、起き上がると。

「…甘いな、甘くて温い」

案の定、アルターが消失したカズマが、ゆらりと立ち上がる。
目にはまだ、戦う意思が残されていた。

「そんなんじゃ、この俺は倒せねえなあ」

「…やっぱり、立ちましたか」

警戒するスバルに対し、カズマは鼻で笑う。
そして右腕を高々と上げた。

「見せてやるよハチマキ女、この俺の決意をお！」

周囲の煙が、虹色の粒子に変わる。

またあの右腕になる。

西色の粒子を見て、誰もがそう思っていたが…。

「へ？」

マヌケな声を発したスバルは、今の考えを一瞬で覆される事となる。

右腕は先程の金色の装甲ではなく、一回り肥大化した橙色の装甲に覆われた。

右肩の後ろには羽根に代わり、金色の風車が生えた。

おまけに、先程までは開いていなかった右目が開き、真上に突起が生まれた。

「シエルブリッドオオツ！！」

名前は同じでも、全く違うものになっている第二形態のシエルブリッドを突き出す。

同時に肩の風車が回り始め、宙に浮きだす。

「うおおおおおおおっ！！！！」

風車の中央から出る風を使い、高速で接近する！
狙いは無論、呆然とするスバルだ。

「えっ！？」

『Protection.』

すぐに相棒であるマツハキヤリバーが防御魔法を発動した。
しかし、第二形態のシエルブリッドの重い一撃に、耐えられるはず

はない。

すぐに亀裂が入ったと思えば、魔法の防御は砕け散った。拳は勢いを劣らす事無く、無防備のスバルの腹にめり込ませた！

「がつ！！？」

信じられない程の重い一撃。

吹き飛んでいく中、スバルは心の中で思う。

威力がさっきの拳なんかよりも、ずっと威力が桁違いだと。

「はぁ、はぁ……！」

吐き気と腹部の痛みに耐えつつ、何とか起き上がる。フラつく足を、何とか止める。

「さぁ、どおしたぁ！？ テメエの意地を見せてみるお！」

この言葉に反応するかの如く、右手の甲と腕にある装甲を開く。光をも吸いこむブラックホールの様に、光を吸収していく。

橙色の装甲は、吸い込んだ光によって、金色の輝きとなっていた。

「もっとだっ！ もっと！ もっと輝けええええええええっ！！！」

第二形態のシエルブリッドに集まった光が、全身にいき渡ると同時に飛びだした！

発する輝きに見惚れていたスバルだが、すぐに頭を横に何度も振る。そして、あれが今まで以上に危険なものであると判断した。

だから彼女は、自身も全力を出そうと決心をする。

「エクセリオンッ！」

魔力の翼が、マツハキャリバーの左右から2枚ずつ生えた。マツハキャリバーのフルドライブモード、“ギア・エクセリオン”を発動させたのだ。

『A・C・S・Standby』

さらにもう一度、練り上げた魔力を前方にスフィアを形成する。無論、左手で再び保持しながら。

「一撃、必倒！」

先程と違い、左手でチャージをしながらマツハキャリバーで高速に移動する！

さらに道行く先にウィングロードを即座に展開する。

宙を舞うカズマの元へと向かう、足場が完成した。

迷う事無く進み、拳を振り上げる！

「デイベインッ！！！」

「シエルブリッドオッ！！！」

目の前にいる相手を睨む。

互いの技をぶつける為に。

そして、己の拳を打ち付ける為に。

「バスタアアアアアアアッ！！！！！！」

「バアアアストオオオオオオッ！！！！！！」

拳同士が衝突し合うと、フィールドに亀裂が入る程の衝撃波が、会場全体に起こる！

水色と金色の眩いほどの光が、辺りを照らす。

「「おおおおおおおおおっ！！！！！！」」

後方に下がる事もなく、両者はただひたすらに前へと突き進む！
二人の考えは、同じだった。

次の瞬間、フィールドを巻き込む大爆発が起こったのだった…。

爆発に耐えたフィールドには、一人しか立っていないかった。

観客席からはよく見えなかったが、マスターとクレイジーにはハッキリと見えていた。

そしてマスターは勝者の名を叫んだ。

「…勝者、カズマ！」

「『『『『『ワアアアアアアアッ！！！！』』』』」

観客の興奮気味の歓声が木霊する。

「お前、結構たのしかったぜ」

バリアジャケットが失われ、気絶しているスバルに、満足げにカズマは呟くのだった…。

「第七試合！ 自らの正義を信じる男！ 劉鳳！」

「…勝つだけだ」

「続いて、恐怖の大魔王！ マリオに何回やられてるの？ クッパ！」

「そんなにマリオに負けてないのだ！」

指定の場所に立ち、両者はさっそく睨みあう。

「構え！」

「亀にやられるほど、弱くはない」

「ほざくな！ 我輩の力を見せてやるのだ！」

「始め！」

「…“絶影”！！！」

叫んだ瞬間、地面がえぐれて粒子になる。

粒子は人を模った物へと変貌した。

背中から二本の青い触手が生えていた。

腕が拘束され、顔が半分しか出ていなかった…。

「ちっ！？ こいつも能力者とやらか！」

「柔らかなる拳・烈迅！」

青き二本の触手は身構えるクツパを狙い、真っ直ぐに伸びた！
槍の様に鋭いそれは、的確に進む。

「そんなもの！ こうしてくれるわっ！」

襲い来る二本の触手を容易く掴み上げ、勢いよく反対側へと投げ捨てた！

無論、絶影も引つ張られるようにそこへ飛ぶ。

しかし空中で一回転し、絶影は難無く着地する。

「フンッ！ 貴様の人形如きでは、この我輩に勝つ事は不可能なのだ！」

「…どうやら、貴様には絶影の真の力を出さなくてはならない様だ

な」

「し、真の力、だと……!?!」

冷や汗を流すクツパに、会場の観客達がザワメキだす。

「見せてやる! 絶影!」

次の瞬間、絶影が虹色に光りだした!

そして光の中で、拘束されていた両腕が解き放たれる。

二本脚だった下半身が、龍の尾に変貌を遂げる。

最後に半分しか出ていなかった顔が完全に開き、その顔が露わとなった。

絶影の完全なる姿、“真・絶影”となった瞬間だった。

「何だとっ!?!」

「終わりだっ!?!」

左手を劉鳳が突き出した瞬間、真・絶影が姿を消えた。
いや、見えなくなる程に速く動いているのだ。

「なっ!?! ど、何処に行ったのだ!?!」

周りを何度も見るが、何も見えない。

音で判断しようにも、聞こえるのは真・絶影が高速で動く時に発する音のみだった。

「貴様の後ろだっ！！！」

「なにっ！？」

後ろに振り向くと、宙に浮かぶ真・絶影が悠然とたたずんでいた。見下すような視線に、クツパは自然と怒りに震える。

「剛なる右拳・伏龍！！！」

右腕の後ろにある一本の刃が、外れる。そして噴射口から火が発し、ミサイル並みの速度で射出された！

「むっ！？ ふんっ！！！」

咄嗟にクツパは右手でそれを受け止める！
重い一撃に驚きつつも、何とか押し返そうと力を入れる。

「ぐっ……ぐぐ……！！！」

徐々にだが、伏龍を押し返し始めた。

さすがはパワータイプのクツパというべきだろう。

「剛なる左拳・臥龍！！！」

だが、劉鳳はさらに追い打ちをかける！
左腕の後ろにある、もう一本の刃が外れ、射出された！

「なっ、何っ！？」

今度は空いていた左手でそれを受け止め、何とか食い止める！
しかし二つの刃の力に押され、重量の重いクツパがギリギリと後ろに下がっていく。

「柔らかなる拳・烈迅！」

攻撃の手を緩めず、鋭い刃と化した触手の一本が空気を切り裂きながら進む！

手は空いていないが、クツパにはまだ攻撃方法はある。

「させないのだっ！」

大きく息を吸い、口から膨大な量の炎を吐きだし、迫りくる触手に浴びせた！

高温の炎には耐え切れず、触手はいとも簡単に塵と化し、空気中にまかれた。

ニヤリと笑い、安心したクツパは吐いていた炎を止めた。

自分の後ろに真・絶影がいる事も知らずに。

気配に感じた時には、すでに手遅れだった。

「い、いつの間につ！！？」

「炎を吐いていた時にだ！」

背後から頭に拳を打ちつけられた事で、両手から力が一気に抜けた。障害の無くなった伏龍と臥龍は、さらに突き進んだ！

瞬時に真・絶影が離れたと同時に、一斉に二本はクツパの腹部に突き刺さった！

「ぐおおおおおおおつ！！！！？」

猛烈な威力に耐え切れずに吹き飛び、遂に場外である壁へと激突した！

壁にめり込んだクツパは、ピクリとも動いてはいなかった…。

「勝者、劉鳳！」

「これが、俺の正義だ…！」

「第八試合！ 全世界で最速の男！ ストレイト・クーガー！」

「さあて、最速の俺と戦うのはどんな奴だ？」

「続いて、管理局の魔法少年！ 愛する少女、キャロル・ルシエを護る騎士！ エリオ・モンディアル！」

「ええっ！？ な、なんで知って…！」

「神だからだ！」

頬を赤く染めるエリオに、クレイジーは断言した。
「プライバシーもへったくれもない。」

「はいはい、とつと構える！」

「ほお、エルオさんか…」

「なっ…！？ エ、エルオです！」

「始め！」

「さあて、エルオさんよお！」

「だからエリオです！」

「んっ？ ああそうか…すまんすまん。俺は名前を覚えるのが苦手
でなあ…」

謝罪をするが、悪びれた様子を欠片も見せていない。

少し怒りを露わにするが、クーガーはまるで気にしない。

「詫びと言っちゃなんだが、見せてやる！ 俺の速さをつ…！！！」

突如、フィールドの何箇所がえぐれ、虹色の粒子になる。

それらはクーガーの足に集まり、何かを形作る。

完成したのは、流線型の装甲だった。

膝まで覆ったそれは、隙間なくピッタリと装着されていた。

「“ラディカル・グッドスピード脚部限定”…！！ さあ行くぜ！」

次の瞬間、エリオの視線からクーガーの姿が消えた。
いや、見えなくなったというべきだろう。

「え…！？」

消えたと理解するとほぼ同時に、腹部に衝撃が走る。
蹴られたと分かった頃には、すでに地面に突っ伏していた。

「ぐはっ…!!!」

吐き気を催しながらも、ストラダを杖代わりに何とか立ち上がる。
しかし今ので分かった。

相手の速さは、自分を大きく上回っていると。

「どおした！？ そんなもんか！？ エルオさんよぉ！」
「…エリオ、です！」

脇腹を押さえながら、ストラダを構え直す。
だが震えている所から、ダメージは大きいようだ。

「お前さんは中々いい…だが、足りない物がある」
「た、足りない物…？」
「そう…それは」

また視界から消えた。

いや、目に見えない速度で走っているのだ。

「情熱！」

何処からともなく、頭にかかと落としが炸裂した。
重心に従い、前のめりに倒れる。

「気合！」

痛みを無視して立ち上がり、すかさず周りを伺う。

しかし気配や影などの、相手の位置が分かるものは何もない。

「度胸！」

ガラ空きの背後からドロップキックが入り、前に吹き飛ぶ。

「そして何よりもお——速さが足りないっ！——！！！」

立ち上がった直後、目の前に現れたクーガーの回し蹴りを浴びる。
何度も地面に激突しながらも、何とか場外ギリギリで止まる。

「う、うう……っ……！」

何もしていないというのに、身体はボロボロだ。
もはや実力は歴然としていた。

「どおした！？ 遅すぎるぞお……！」

再びクーガーが、常人では見えない速度で走り出した。

だがこれに対抗する術を、エリオは持っていない訳ではない。

見えないのなら、フィールド全体に攻撃すればいい。

「ストラーダッ！」

『Form Drei・Unwetterform』

音声を発したストラーダは、噴射口と石突から金色の突起物が出た形状に変化した。

第三形態、“ウンヴェッターフォルム”へと。

薙ぎ払う様に振るい、三角型の黄色の魔法陣が足元に展開される！

「サンダー！ レイジ！！！」

勢いよく、ストラーダの矛先を地面に突き刺す！

刺さった直後、先端部から電撃がほとばしり、地面に流し出した！

「ぬう！？」

危険を察したクーガーは近づくのをやめ、電撃が流れることのない空中へと跳ぶ。

そして、エリオはこれを持っていた。

空中ならば、避けられることはないと踏んだのだ。

「今だっ！」

『D u s e n f o r m . 』

突然、発した光にストラーダは包まれた。

収まると、またも形状が変化を起こしていた。

後方2機だけだった噴射口が、側面部に4機も増え、後方噴射口も形状が変化していた。

高速で移動するストラーダの第二形態、“デューゼンフォルム”へ。

「はあああああつ!!!」

ブースターから魔力をロケットのように噴射し、一気に加速する！

推進力を利用し、凄まじい速度で槍の矛先を向ける！

空中では、避ける気配も見せずに、クーガーはうつむいていた。

「…止めさせたな？」

だがエリオにとって予想外だった事は、彼が怒っていた事だった。

自身の生きがいは、誰よりも速く走ること。

その走る事を止められた事に対して、完全に怒り狂っていたのだ。

「この俺を止めさせたなあ!!!？」

音をも超える速さで空中を飛ぶ。

そしてストラーダを駆使して迫るエリオに対し、跳び蹴りの構えを取る。

「しょおおおおおげきのおおおおおおつ!!! ファーストブリ
ツドオオオオオツ!!!」

先程とは比べ物にもならない速さと威力の蹴りは、突貫するエリオをストラーダごと蹴り飛ばした！

矛先が砕け、破片が辺りに飛び散る。

「まだだあ！ 壊滅のお！」

地面に着地し、すかさず意識を失いかけているエリオに向かう。
走りを止められた彼の怒りは、一撃では済まないのだ。

「セカンドブリッドオオツ!!!」

容赦なく空中から蹴り飛ばすと、その衝撃で会場に震動が走る！

フィールドにめり込んだエリオは、意識を失っていた。

半壊したストラーダを握り締めたまま。

対するクーガーは華麗に着地を決め、両手を上げてポーズをとった。

「ああ、2分37秒42……また世界を縮めてしまったあ……」

「勝者、ストレイト・クーガ「エリオオツ！」あつ？」

宣言をしているマスターの前を、一陣の風が巻き起こる。

風の正体は、バリアジャケットを装着したフェイトが通り過ぎた際に出来たものだった。

誰にも目にくれずに、急いだ様子でフィールドに降り立っていた。

「大丈夫！？ エリオ！」

気を失っているエリオを抱き起こし、必死で呼びかける。
死にはしないとはいえ、怪我はする為に心配なのだろう。

「どきな！ 怪我を治すから！」

「お願いします！」

素早くクレイジーは降り立つと、呪文の様なものをかけ始める。

彼女の知り合い達も、心配そうな表情でフィールドを見ている。
あれ程ボコボコにされては、誰もが心配するだろう。

そんな中…。

「俺が遅い？ この俺がスロオリイだとお…？」

今の光景を見ていたクーガーは、頭を抱えていた。
自分よりも速い者は、この場にはいないと思っていたからである。
しかも女性だったのが、さらにショックを与えたようだ。

「…おおい、クーガーさん。フィールドから出てくれって……
聞いてねえな」

本日二度目のタメ息をついて、マスターはゲンナリするのだった…。

第四話：第六試合、第八試合 アルターの大激闘！（後書き）

第四話、いかがでしたでしょうか？

何故かこの話が、一番長い物になりました…（何故だろう？）

次回は、第九試合を書きたいと思います。

ご感想、ご意見をお待ちいたします。

尚、このキャラを戦わせたいというのがあれば、どうぞ♪

第五話：第九試合、第十試合 ポケモンVSデジモン！ （前書き）

アルター能力者の凄まじい戦いが見られた前回。
今回は、ポケモン対デジモン…！？

第五話：第九試合、第十試合 ポケモンVSデジモン！

「第九試合！ データのモンスター、通称デジモン！ 小さな体に秘めたる力！ アグモン！」

「進化できないんじゃ、微妙だな」

「続いては、三匹をうまく指示して戦うぜ！ デジモンとの違いを見せてやる！ ポケモントレーナー！」

「…俺の本名は、言われないのか？」

「うん！」

親指を立てる様を見て、タメ息について指定の位置につく。

「両者、構え！」

「よぉし！ がんばるぞぉ！」

「いくぞ！ ゼニガメ！」

「ガメエッ！」

「始めっ！」

「ベビーフレイムッ！」

始まった直後、アグモンは口からサッカーボールと同じ大きさの炎を吐きだす！

「ゼニガメ！ みずでっぽう！」

「ガメエ！」

口から吐き出された大量の水に、炎の球は押される。大した熱量を持っていなかったのか、呆気なく蒸発し、湯気となった。

「よし！ もう一度みずでっばうだ！」

「ガアメエッ！」

口一杯に吐き出された水が、無防備のアグモンにかかる！

「うわあっ！！？」

膨大な水圧に耐えきれず、あえなく地面に倒れ込む。単純な攻撃ではあるが、威力は高かった。

「…や、やっぱり進化できなくちゃ……」

起き上がるものの、勝てる見込みがない。

しかしそんな中、ある人物の声がアグモンにしっかりと聞こえた。

「アグモンッ！」

「た、“太一”！？」

アグモンを呼ぶ声は、パートナーである太一の声だった。

パートナーがこの場にいないと思っていた為、驚きながら顔を客席に向ける。

『そうそう！ 言い忘れてたけど、君のパートナーは進化できる様に呼んどいたから』

「もっと早く言ってよ！」

『あゝ、すまん』

ペコリと身体全体でお辞儀し、謝罪する。

だがこれで、勝てる可能性が浮き上がってきた。

「それよりアグモン！ 進化だ！」

「分かった！」

次の瞬間、アグモンから光が発せられた！

これが進化の光であると、分かった者は少ないだろう。

『アグモン進化！』

「なにっ!？」

突然の輝きに、ポケモントレーナーの指示が止まる。

ゼニガメも眩しさからか、両手で目を隠していた。

『グレイモン！』

光が収まった頃には、先程までの小さな恐竜姿のアグモンではなかった。

その身体は巨大化し、さらに恐竜らしさの巨体となっていた。

さらに鋭利な爪に、大きな角。

アグモンが“成熟期”へと進化した、“グレイモン”の姿へと。

「いくぞ！」

気合の入った声で叫び、ゼニガメを睨む！
まるで違う目からの気迫に、一瞬ひるんだ。

「メガ！ フレームツ！」

先程とは比べ物にならない大きさの炎の球を、勢いよく吐きだした！

「ぜ、ゼニガメ！」

「ガメエツ！！」

再び水を吐き出すが、威力が段違いの炎の球を消す事などできなかつた。

接触した瞬間に蒸発し、特に効果をもたらはしなかった。

速度が落ちる事もなく、徐々に落下していく！

「ま、まずい！ 戻れゼニガメ！」

一発で大ダメージになると、ポケモントレーナーは理解したのだ。
モンスターボールから放たれた光で間一髪、ゼニガメを戻す事が出来た。

対象のいなくなった炎の球は、地面に接触して爆発した！

「ぐっ！？」

熱量と爆風に耐えながら、腰から他のモンスターボールを掴む。
すぐにそれを、地面に強く投げつけた！

「いけっ！ リザードンッ！」

「グオオオオオオッ！！！」

咆哮を上げつつ現れたのは、ポケモントレーナーの最強のポケモン、リザードンだった。

目には闘志を宿らせ、グレイモンを睨みつける。

「リザードンッ！ かえんほうしゃ！」

指示を受け、口から荒れ狂う炎の渦が吐かれた！

炎の球とは比べ物にならないほどの、熱量であった。

「メガフレイムッ！」

量から避けられないと思い、負けじと炎の球を吐き出す！
だが量だけでなく、威力までもが、リザードンの炎が勝っていた。

あっさりと飲み込まれ、逆に炎の威力を増やしてしまう結果となった。

「ぐあああっ！！！」

避ける事もままならず、全身を炎が襲った！
灼熱の炎を吐き終えた頃、グレイモンの身体は、至るところが黒く焦げていた。

「岩くだきをお見舞いしてやれっ！」

「グルアッ！」

攻撃の手を緩めるわけもなく、フィールドの一部を削り取る。それを両手で抱え、勢いよく頭突きで割る。

割れて出来た破片が、グレイモンに弾丸の様に降り注いだ！

「うわあああああつ！！！！？」

破片が身体中にめり込み、猛烈な痛みが襲う！。

倒れかかる身体を、何とか意地で保たせる。

だがいつ倒れても不思議ではないダメージを受けている。

誰もが勝ち目などないと、誰もが思っていた。

「グレイモーンッ！！！」

そんな中、観客席から太一の悲痛な叫びが上がった。
パートナーを思いやる気持ち――。

この想いが、グレイモンを更なる進化へと導くことになる。

突如、またも光にグレイモンの全身が包まれた！

『グレイモン！ 超進化！』

頭と鋭い角が、鋼鉄で出来た装甲に覆われる。

さらに胸と左腕が、完全な機械と化す。

最後には背中から六本の羽根が生えた。

『メタルグレイモン！』

成熟期の一つ上、完全体である、“メタルグレイモン”となった瞬間であった。

「なっ！？ もう進化できるのかよ！？」

ポケモンを遥かに超える進化の速さ。

さすがに驚くが、すぐに冷静になって相手の出方をまった。

「トライデントアームツ！！」

先手を切ったのは、メタルグレイモンだった。

完全に機械化した左腕を、リザードンに叩きつける！

「グオオオオオッ！！？」

機械化したことによる力の向上があつてか、一撃で巨体を揺らす。それだけでやられる訳もなく、体勢を立て直す。

「はあっ！」

反撃する隙を与えず、続いて金属で覆われた角をぶつける為に突進

する！

「飛べえ！」

「ガウッ！」

すぐに翼をはばたかせると、宙を舞ってその場から離れる。

突進を止めて急停止し、メタルグレイモンは上空へと目を動かす。

「リザードンッ！」

「ガアッ！」

口を大きく開き、膨大な量の炎を溜め始める。

今までの炎よりもずっと威力は高くなるだろうと、簡単に分かった。

「メタルグレイモン！」

太一の叫びに応える様に、機械となった胸部が左右に開いた！

二つの発射口が顔を覗かせ、リザードンに向ける。

「ギガッ！ デストロイヤー！！！」

核弾頭級の威力を誇る二発のミサイルが、一斉に射出された！

無論狙いは、上空で炎の力を溜めているリザードンだ。

「リ、リザードンッ！ かえんほうしゃー！！！」

慌てた様子で、ポケモントレーナーは指示を出した。

遠距離の技があるだろうとは予測していたが、ミサイルだと思わなかったからだ。

「ガァ…！」

大慌てで吐き出そうとしたが、ひと足遅かった。

ひと足早く、二つのミサイルがリザードンに接触した。

その瞬間、強烈な爆発と衝撃が発生し、閃光がフィールドを覆う！

「ガァァァァァァァァ——ッ！！！！？」

直撃した二つのミサイルに、あえなくリザードンは墜落していく。
傷だらけの身体は耐えきれずに、フィールドに大きな振動を起こして倒れた…。

「…勝者、メタルグレイモン！」

観客が歓声を上げる中、メタルグレイモンは太一のいる場へと翼をはばたかせる。

「やったなメタルグレイモン！」

「太一のお陰だよ！」

ハイタッチして、ニッコリと笑い合っただった…。

「第十試合！ 誇り高き獅子！ 悪は絶対に許さない！ レオモン

「！」

「正義のために！」

「続いて…波動を極めた格闘！これで倒れぬわけがない！ルカリオ！」

「……………」

二人は静かに指定の位置に立つ。

「構え！」

「全力でやらせてもらう！」

「……………」

「始め！」

「獣王拳！！！」

「波動弾！！！」

開始直後、互いの拳から生み出した技を、素早く打ち出す！
それらは衝突し合うと、小規模の爆発を起こした！

「はぁぁぁあぁっ！！！」

煙が漂っても構わず、レオモンは気配のする場所へ足を進める。
予想通り、そこにいたルカリオに容赦なく拳を打ち出す！

「っ！！！」

拳に気付いたのか、後方に下がって危機を脱する。
下がった場所で素早く、両手に波動の力を溜める。

「波動弾!!」

先程よりも一回り大きくなった波動の球を、両手首を合わせて打ち出す!

体制を立て直している最中のレオモンに、避ける術はなかった。

「ぐおっ!!?」

まともに腹部にもらい、身体がよろける。
片膝を地面につけそうになるが、気合いで乗りきる。

「くっ! 獣王拳!」

そして右拳に集めた闘気の塊を、お返しに打ち出す!

「っ!」

避けられないと思ったのか、両腕を交差させて攻撃を軽微にする。
その隙に体勢を立て直し、睨みあいが始まる。

「ほぼ直角か…ならば、一気にケリをつけさせてもらっ!」

両腕を構えた瞬間、レオモンが光に包まれる!

『レオモン! ワープ進化あ!』

光の中で二足歩行から、四足歩行へと変化する。

口からは発達した二本の牙が飛びだし、鋭い爪がそろつ。

最後にたてがみが生え、長い尾が地面を叩いた。

『サーベルレオモン！』

究極体の姿、“サーベルレオモン”へと変貌した。

「インフィニティアロー！！」

たてがみが反応し、より一層に逆立つ。

そこから無数の毛を、矢のように飛ばしだした！

「かげぶんしんっ！」

冷静に攻撃を分析し、回避をルカリオは選んだ。

発生した残像をうまく使い、巧みにかわす。

「波動弾！」

一瞬の内に背後に周りこむと、前もって溜めておいた波動の弾を連続で撃つ！

「遅いつ！」

しかしマツハのスピードを出せるサーベルレオモンに、その攻撃は意味をもたなかった。

目にも止まらぬ速さで左右にへと順々に移動し、かすりもしなかった。

「っ！？」

「インフィニティアロー！！」

予想以上の速さに驚きつつも、再び飛来する無数の毛をかわし続ける。

だが、避けきれなかった毛の一本が、左足に刺さる。
刺さった途端、ルカリオの身体はピクリとも動けなくなった。

「……！？」

痛みは騒ぐほどではない。

だというのに何故、動けないのか分からなかった。

「言っていないかったが、私の毛には毒があつてな。一時的に身体が麻痺させる！」

動かなくなった理由を律儀に説明すると、勢いよく跳びかかる！

「ネイルクラッシャー！！！！」

鋭く巨大な爪が、ルカリオの腹部に叩きつけた！
嫌な音を立てながら、爪が深々とめり込んでいく。

「がはあああつ！！！？」

凄まじい威力を持った爪は、ルカリオの身体を大きく吹き飛ばした！
地面に激突しながら、遂には場外である壁に激突するのだった…。

「…勝者、サーベルレオモン！」

「…これでまた、私は強くなれた」

退化してレオモンに戻ると、目を閉じて静かに瞑想するのだった…。

因みに余談だが…。

「スロオリイ…！ この俺がスロオリイだとお…！？ しかも一人
と一匹に劣る…！？？」

「…太一、この人どおしたの？」

「わかんねえ。サーベルレオモンが走ったのを見てからあんなにな
った」

観客席では、サーベルレオモンの速さを目の当たりにして、クーガ
ーが頭を抱えていた。

それをアグモンと太一は、漫画のような汗を流して見ているのだっ
た…。

第五話：第九試合、第十試合 ポケモンVSデジモン！ （後書き）

第五話、いかがでしたでしょうか？

今回はあまり多くなくてすいません…うう、ガンバレ俺。

次回は第十一試合から書きたいと思います！

ご感想、ご意見、このキャラ同士を戦わせてなど御座いましたら、
どうぞ！

お待ちしております！

第六話：第十一試合、第十二試合 最強のガンダムファイターズ！（前書き）

デジモンとポケモンのバトルが繰り出された前回。
今回の試合は、二人のガンダムファイター……！

第六話：第十一試合、第十二試合 最強のガンダムファイターズ！

「第十一試合！ とても恥ずかしい告白をしたガンダムファイター！ 人の恋路を邪魔するな！ ドモン・カッシュ！」

「そ、そんなこと言わなくていい！」

「対するは、下品だけどそれがどうした！ ニンニクは欠かせないぜ！ ワリオ！」

「楽勝だぜ！」

指定の位置に立ち、早速にらみあう。

「構えっ！」

「こんな奴、すぐに捻り潰してやるぜ！」

「その言葉、そっくり返すっ！」

「始めっ！」

走り出したワリオは、右手で握り拳を作る。

手から血管が浮き出ており、その力の強さが表わされていた。

「喰らいやがれっ！」

これを動かないドモンに向け、打ち出す！
強烈な拳が、顔面を狙う。

「ふんっ！」

しかしそれは寸前で止まった。

片手でワリオの力任せの拳を、受け止められたからだ。

「何だと!？」

「…この程度では話にならん!」

掴んでいる手、その反対の手を握り拳に変える。
それがドモンの、反撃の合図だった。

「肘打ち!」

最初にワリオのたるんだ脇腹めがけ、肘を打ち込む!
深々と肘がめり込んだ。

「ぐへえっ!!?」

「裏拳!」

思わず絶句するワリオを尻目に、攻撃を続ける。
脇腹から肘を抜き、すかさず手の甲で殴り飛ばす!

「じほっ!!?」

衝撃に耐えきれず、吹き飛んでいく。
走ってその後を追い、ドモンは右腕を構える。

「正拳!」

目立つ真っ赤な鼻に、正拳突きをお見舞いする!

骨が折れるような音がしたが、あえて無視。

「は、鼻があっ！！！！？」

「たああありやああああああっ！！！！！！」

止めに、^{かかと}踵落としが頭部に直撃した！

まるで鉄球が頭に押し掛かった様な錯覚を、ワリオは覚えた。

凄まじい勢いで、フィールドに顔面を押し付ける形になった。
衝撃で亀裂が入ったのが、威力の高さを物語っている。

「ぐっ…！ あんのやろお！ もう勘弁しねえぞ！」

めり込んでいた顔を抜き、ふらつく身体で何とか立つ。
痛みで身体中が悲鳴を上げているが、構わない。

「そうだった！ 確か…！」

なにかを思い出したのか、ジーンズのポケットを探る。
お目当てのものが見つかったのか、すぐに手を出した。

「ジャンジャジャーンッ！」

天高く掲げ、大袈裟な効果音を出す。

取り出したものは何の変哲もない、ただのニンニクだった。

「ニンニク食べて…！！」

一個を丸ごと、一口で噛み砕く。

よく噛み、そして飲み込む。

すると突然、身体から光が発せられる！

光が収まるとそこには、紫色の覆面とマント。

ニンニク柄の、趣味の悪い紫の服。

ワリオのフルパワーの姿が、お披露目された。

「ワリオマン」！」

決めポーズを取ると、しばらく硬直する。

誰もがダサイやカッコ悪いと思う中、構わずドモンを睨む。

「ボッコボコにしてやるぜ！！」

宣言した途端、先程を大きく上回る速度で駆け出す！
そして拳をマシンガンのように打ち出していく。

「…確かに速い。だが」

冷静にドモンは、次々と来る拳を一発ずつかわしていく。

大きなモーションで避けているのではない。

ただ、体を少しずらしていくだけで避けているのだ。

「何だっ！？」

「そんな単純な攻撃など！」

イラつきと焦りを持ちながら、さらに高速で打ち続ける。
だが、かする事もなく避けられているのでは意味もなかった。

「ガラ空きだぞ！」

「うおっ！！？」

ガラ空きの足を蹴り払われ、盛大な音をたててワリオは転ぶ。
すぐに立ち上がり、怒りを込めた視線を送る。

「この野郎！ これでも喰らいやがれえっ！！！！」

何処からともなく、バイクがフィールドに出現する！

「とおっ！」

それに飛び乗り、ハンドルを握る。

エンジンに火を入れると排気ガスが排出され、タイヤが回転する。

そして、ドモンへとバイクを走らせる！

信じられない事に、そのバイクの速さはクーガーと同等であった。

「俺のこの手が光って唸る！」

迫りくるバイクに対し、悠長にも右手を構える。

右手の甲に光が発すると、トランプのキングの絵柄が浮かび上がる。

「お前を倒せと輝き叫ぶ！」

目と鼻の近く距離になる頃合いを見計らい、飛びだす！
バイクに轢かれそうになるギリギリのところで、横へ動く。

「必殺っ！ シャアアイニングッ！！ フィインガアアアアッ
！！！！！」

すれ違い様、太陽のように輝く右手を繰り出す！
強力な握力で額を掴み、力を入れてゆく。

「ぐおっ！！？」

そのまま勢いにつて、操縦席から離す！
運転手がなくなったバイクは、盛大な音を立てて横転した。

これを余所に、ドモンは右手に力を入れ続ける！

「ギャアアアアアアアッ！！！！？」

ミシミシと骨を握り潰すような音が、額からする。
悲痛の叫びが、会場中に響く。

「あ…がつ…！！！」

遂には、喉から声はでなくなった。
さらに白目をむき、ピクリとも動かない。

「ふんっ！」

輝きを失った手を、額から離す。

動かなくなったワリオは当然、フィールドに倒れる。

それを尻目に、そのまま悠然と歩いてゆく。

「勝者、ドモン・カッシュ！」

「修行して出直してくるんだな」

捨て台詞を言い、観客席へ戻って行った…。

「第十二試合！ 狗族と人間のハーフ！ 頭の耳はコスプレではな
いっ！ 犬神小太郎！」

「…なんか、腹の立つ紹介やな」

苛立ちながらも、コタローは降り立つ。

「続いては…老人だが油断するな！ 最強のガンダムファイター！
東方不敗・マスターアジア！」

「ほお、ワシの出番かつ！」

対する東方不敗も、観客席から跳び下りる。

「両者、構え！」

「ふっ！ この程度の若僧に負ける東方不敗ではないわっ！」
「あんまり俺を舐めんなよジジイ！」

「始めっ！」

「どれ、まずは相手がどう動くか見るとするか…」

後ろで手を組み、余裕の態度を東方不敗はとる。

小太郎がどんな動きを取るか、様子を探るつもりなのだ。

「容赦しないで、爺さん…！」

様子を見る気が更々ない小太郎は、その場で握り拳を作る。
高速で移動ができる“縮地”を利用し、一気に間合いを詰めた！

「もらった！」

ストレートに拳を、ガラ空きの腹部に打ち出す！
だが東方不敗の目は、彼の拳を見極めていた。

「遅いわぁ…！」

あと数センチほどで当たる寸前で、拳は受け止められた。
しかも、たった一本の指で。

「な、何やと…!!？」

「愚かな…：：：拳とは——こういうものだっ！」

逆に東方不敗が放った拳が、腹部にめり込む！

「があっ…!!!!？」

突然の腹からの衝撃に思わず、両手でそこを押さえて苦しみ出す。衝動的に吐き気が襲い、本人の意思とは関係なしに屈んでしまう。

「その未熟な腕で…」

苦しむ小太郎に、静かに諭していく。

視線は、見下しているようにも見えた。

「この東方不敗がやられるものかあ！！！」

「…舐めんなっ！」

未だに痛む腹を無視して跳び起き、回し蹴りを放つ！
今度は右腕で防がれたが、それで諦めるはずがない。

「まだまだあっ！」

体勢を立て直し、さらに高速で拳と蹴りを順々に放っていく！
しかし、それでも東方不敗は余裕だった。

右腕だけで、拳も蹴りも、何もかも軽々と防がれていった。

「そんなアホなっ！！？」

「攻撃が単純！ そのうえ力も入っておらぬわ！ たわけが！」
「くっ！」

覇気と言動に動揺してか、余計に攻撃が単調なものと化していく。
これが原因でほんの一瞬だが、拳を戻す動作に隙が生じた。

「―波っ！」

もちろんそれを見逃しはしなかった。

この隙を突き、目に見えない速さの掌底を顔面に叩きこんだ！

「ぐおっ！！？」

はるか遠くまで吹き飛ばされ、仰向けに地面へ激突した。
顔全体に激痛が走るうえに、鼻血が流れる。

「ぐ…がつ…！」

それでもお構いなしに、小太郎は立ち上がる。
痛みと疲れで震える身体を、力づくで止めながら。

「…ほお、まだ立てるとは……」

意外だったらしく多少、眉を上げた。

「こ、こんなもん…で…！」

闘志を込めた視線で、悠然とたたずむ東方不敗を睨む。
荒く、激しい息遣いをしながら、両腕をしっかりと伸ばす。

「俺は…！ 倒れへんっ！」

この状態で静止していると、両手に気を練りだしていく。
小さな気が徐々に大きくなっていき、大きなものとなる。

気を溜める間、大きな隙ができてしまう。

しかし律儀にも、何故か東方不敗はそれを待ち続けた。

「…最大の技を、このワシにぶつけるがいい！ 若僧！」

会場に響く様な大声で、東方不敗は叫んだ。
そう、何度も立ち上がった事に敬意を表し、わざわざ当たろうというのだ。

彼の武道家の心に、火が付いたのだった。

「言われんでもお…！」

両手で膨大な量の気を保持しながら、縮地で一気に間合いを取る！
避けも防御もしない東方不敗に。

考える事は、ただ一つ。

倒すことだけだった。

「喰らえっ！ 犬上流・狼牙双掌打ッ！！！」

腹部に目掛け、両手で作った気をぶつける。
そのまま力の限り、連続で打ち付ける！

「ぬうつ！！！」

小太郎の魂を込めた必殺技は、東方不敗に届いた。
腹にくる凄まじい衝撃に、堪らず声を上げた。

フィールドの埃が、技によって生じた衝撃波で飛ぶ。

「ど、どうや…！ き、効いたやろ、ジジイ…！」

うつむきながら、荒い息遣いを繰り返す。

今の一撃で完全に、すべての力を使い果たした。

これで、勝った…！

「…貴様の勝利への執念、中々のものだ」

その考えは、静かな声によって夢に終わった。

驚きで目を見開き、最後の力を振り絞り、顔をあげる。

自身の最大技を受けたとは思えない表情の、東方不敗がいた。

「それに応え、ワシの最大奥義を見せてやろう！」

右手をかざし、目を閉じる。

すると、会場中から力が集まり始める。

「流派！ 東方不敗が最終奥義！」

留まることを知らずに、力が右手に集まっていく。

膨大な量の気が、溜まった瞬間。

「石波！ 天驚けええええんっ！！！！！」

勢いよく突きだした右手から、巨大な張り手の形をした気功弾が打

ち出された！

手のひらの中央に“驚”の字が書かれ、目の前にいる小太郎へと突き進む。

「…っ！」

これを避けられるほど、彼に体力は残っていなかった。首を動かせないまでに体力を失っている彼には。

張り手と接触した直後、大爆発と共に閃光がほとばしった…！

閃光が収まると、小太郎のいたフィールド側は半壊していた。辛うじて、原形は留めてはいた。

「……………」

半壊した場の中に、服と体が傷だらけになった小太郎の姿があった。勝ちたいという願いは叶う事無く、意識を失っていた。

反対側では、右手を突き出した状態で止まっている東方不敗の姿があった。

「勝者、東方不敗・マスターアジア！」

勝利宣言を受け、観客席へと足を進める。その最中、突然に足を止めた。

「…小太郎よ、精進せよ。更に強くなって、もう一度このワシと戦

うがよい
」

小さく、静かな声で呟く。

将来が楽しみだと言わんばかりの笑みを浮かべながら…。

第六話：第十一試合、第十二試合 最強のガンダムファイターズ！（後書き）

第六話、いかがでしたでしょうか？

たくさんまだ残っているので、どいう風に戦わせるか考え中です…。

ご感想、ご意見をお待ちしております。

このキャラ同士を戦わせたいというのがあれば、どうぞ。

第七話：第十三試合、第十六試合　ありえない大怪盗（前書き）

ガンダムファイターの戦いが終わった前回。
今回は、大怪盗たちの戦い…！

第七話：第十三試合、第十六試合　ありえない大怪盗

「第十三試合！　伝説の刀、“斬鉄剣”の持ち主！　ありえない剣技を見せる！　石川五エ門！」
「いざ、参る…」

「続いては、京都に伝わる神鳴流の使い手！　見習いだからと油断するなよ！　桜咲刹那！」
「行かせてもらいます！」

それぞれが大事な刀を持って、指定の位置に立つ。

「五エ門、せいぜい加減しろよー」
「あんまり怪我をさせんなよー！」
「五エ門！　貴様、少女を傷つけたら逮捕だあーっ！」

仲間から彼等らしい声援を受け、五エ門は薄らと笑う。

「刹那さん！　がんばって！」
「無駄しないでよ！」
「まあ、精々やるがいい」
「頑張れやあー！」

仲間の声援で、刹那にもより力が入る。

「では…構えっ！」
「いざ尋常に！」
「勝負！」

「始めっ！」

「行きます！ 斬空閃！！」

手始めに刹那は、愛刀である“夕凧”を鞘から抜いたと同時に、曲線状の気を放つ！

空気を裂きながら、五エ門を目掛けて一直線に進む！

「……………」

傍観していた五エ門は黙ったまま、閉じていた目蓋を開く。

ゆっくりとした動作で、鞘から“斬鉄剣”を抜いた瞬間だった。

「な…！？」

信じられない結果に、刹那はただ硬直していた。

驚くのも無理もない。

迫っていた曲線状の気を、跡形もなく“切り捨てた”のだから。

しかも気を使う人間なら分かるが、使っていない人間によってだ。

「参る！」

だが五エ門が凄まじい速さで迫ってきたことで、思考を一時中断した。

すかさず夕凧を構え、同様に走りだす。

「斬岩剣！！！」

先手必勝。

かなり近づいたと同時に、岩をも切り裂く奥義を向ける！

「ふんっ！」

だが、それはあっさりと斬鉄剣の刃で阻まれる。
受け止められたと理解するのに、数秒かった。

「そ、そんなっ！？」

奥義がこうも、あっさり止められると思わなかった。
動揺し、汗が額から頬に流れる。

「…遅い。この程度なのか、神鳴流とは…」

落胆した声での一言に、刹那の中で何かが切れた。
自分の事だけならまだしも、神鳴流をも馬鹿にされた。

怒りが頂点に達するのに、時間はそうかからなかった。

「貴様あ！！！！ 百花繚ら——！！！！」

怒りのあまり間合いなどを考えずに、再び奥義を放とうと動く。
しかし冷静さを欠き、なお且つ無駄の多い動き——。

この二つが、決定的な命取りになる。

「でいいいあああああつ！！！！」

気合の叫びと共に、五エ門は斬鉄剣に力を込める。
そして、目にも止まらぬ速さで走る！

さらにすれ違いに、隙だらけの刹那の手から、簡単に弾いた。

強く握り締められていた、夕凧を。

「…っ！？」

驚く刹那を尻目に、背後では五エ門が斬鉄剣を鞘に納める音。
続いて円を描いて吹き飛んでいた夕凧が、フィールドに突き刺さる音だった。

「夕凧…！」

ショックで身体がワナワナと震え、地面にへたり込んだ。
やがて顔を俯かせながら、蚊の鳴くような声で呟いた。

「……私の、負けです……」

今の剣の腕では、あの男には勝てない。
それが分かったから、棄権を選んだのだ。

悔しさが伝わる言葉を、確かにマスターは一言も落とさずに聞いた。

「…棄権を確認。勝者、石川五エ門！」

勝利宣言を受けた五エ門は何を思ったのか、刹那へ歩み寄った。

「たとえどんな名刀であろうとも、使い手が未熟であればそれは過ぎた物…」

「っ!?!」

「さらにお主は怒りによって冷静さを失い、刀を曇らせた…それが、敗因でござる。」

通り過ぎ際に小さな声で語ると、観客席へ立ち去っていった。

一方の刹那は、突き刺さった夕凧を見つめていた。

「刀が曇っていた…か」

たった今聞かされた言葉を口ずさみ、己の未熟さを悟るのだった…。

「第十四試合！ 黒帽子がトレードマーク！ コンバットマグナムが今日も火を噴く！ 次元大介！」

「やれやれ、俺か」

「続いては…あやとりに昼寝、そして射撃！ 微妙なもんばつか得意！ 野比のび太！」

「そおんな紹介しないでよお！」

次元はコンバットマグナムを、のび太はフワフワ銃を腰に差し、指定の位置に立つ。

「構えっ！」

「こ、怖そうな人…」

「俺はこんな坊主と、か」

「始めっ！」

始まった途端、ほぼ同時に腰に差しておいた銃を取る。

「っ！」

伏せる形で前に跳び込んだ次元は、銃身を相手の額に合わせる。

一方のび太は横に跳びこみ、フワフワ銃をコンバットマグナムへ向けた。

互いに狙いが定まった瞬間、二つの銃の撃鉄を親指で下ろす。そして素早くトリガーが――。

引かれた。

一発目の銃声の後、すぐに二発目の銃声が会場に轟く。

数秒後、一陣の風が吹く中…。

フィールドにコンバットマグナムが大きな音をたてて落ちる。
さらに横へ跳んでいたのび太が仰向けで倒れ、そのまま動かなくなっていた。

「…勝者、次元大介！」

何が起こったのか、答えは単純明快である。

最初に、コンバットマグナムから弾丸が飛び出た。
そのすぐ後、フワフワ銃から弾丸が撃ちだされた。

弾と弾はぶつかりあう事無く、すれ違う。

そして次元の銃弾が、のび太の額に。

さらにのび太の銃弾が、次元の手からコンバットマグナムを弾いたのだった。

「…坊主、中々いい腕だったぜ」

コンバットマグナムを拾いながら、気絶しているのび太に呟くのだった…。

「第十五試合！ 敵すら呆れるおちゃら気さ！ 嵐を呼ぶ園児！
野原しんのすけ！」
「ほっほーいっ！」

「続いては…先祖は名高きアルセーヌ・ルパン！ 女に弱いオツチ
ヨコチヨイ！ ルパン三世！」
「誰がオツチヨコチヨイだ！」

不機嫌そうな顔でルパンは指定の位置に立つ。
遅れたしんのすけは、ジャンプして位置についた。

「構えっ！」
「おかまいなく！」
「いや違っただろ！」

「始めっ！」

「よおーし、おじさんっ！ じんじょうにしょうぶっ！」
「おおっ！ こい！」

子供である故に、余裕の態度でルパンは臨んだ。
勢いよくしんのすけは走り、右手を前に出すと、大きな声で言った！

「ジャンケン！ ポンッ！」

会場にいる全員が席から転げ落ちた。

まあ、無理もない。

まさか試合でジャンケンをする人物がいるなどと、誰が思うだろうか？

彼の性格をよく知っている者は、苦笑いを浮かべていた。

「なにいつ！？」

反射的にグーを出してしまったルパンは、しんのすけのパーに負けてしまった。

しかし、これで終わるのではなかった。

「あっちむいてえゝ…！ ホイツ！」

「うええっ！？」

天を指す人差し指につられ、つい上に顔を向けてしまった。すぐにしまったという顔をするが、遅すぎた。

「わーいつ！ オラのかちー！」

お尻を振りながら踊っていると、ルパンが悔しそうな顔で自分の手を見ていた。

こんな結果では満足しないといわんばかりに、地団太を踏む。

「まだだあつ！ 三回勝負だ三回い…！！」

「えゝっ？ んもう、しおがないなあゝ」

苦し紛れの言い分に、渋々しんのすけは右手を構える。
ここに、今試合の勝敗を賭けたジャンケンが始まった。

「ジャンケンポイツ！」

先ほど同様の結果となったジャンケンに、またもルパンは悔しそうな顔になる。

「アツチむいてホイッ！」

気にせず、しんのすけは元気に続ける。
だされた指で右の方向へとさす。

「あぁっ！？ しまったぁっ！？」

右に向いてしまったルパンの悲痛な叫びが響く。

「くっそっ！ ジャンケンポイツ！」

今度ルパンが出したのはチョキ、しんのすけはパー。
勝利にニヤリと笑い、指をしっかりと伸ばす。

「アツチ向いてえっ！ ホイツ！」

人差し指が、下を指したのに対し――。

「ホイッ！」

しんのすけの顔は、天を向いていた。
ま逆だったのだ。

「チツ、チキショーッ！」

「あまいぞおじさん！ ジャーケンポイツ！」

今度、しんのすけが出したのはグー。

チヨキを出したルパンの負けだ。

「や、やばっ！？」

「ホーイツ！」

しんのすけが指したのは…左。

「…負けたぜ、坊主」

諦めた表情で、ルパンはタメ息をつく。
彼が向いた方向は、左だったのだ。

「しょ、勝者、野原しんのすけ…」

こんな勝負のつけ方でいいのかと言わんばかりの空気の中で、マスタの声が聞こえる。

観客も同様だが、ブーイングを出しはしない。

小さな子供に、それは酷だと誰もが思っているからである。

「おもしろかったゾ、おじさん。またやろっね！」

そんな空気をそっちのけで、しんのすけは手を振って観客席に戻っ

て行つた。

子供らしく、無邪気に笑いながら。

「…面白かった、か。まあ、俺もだけどな」

負けたのに、悔しさがルパンには欠片もなかった。

本当に楽しかったのだ。

ジャンケンではなく、しんのすけとの試合が。

満足した笑みを浮かべながら、のんびりと後を追うように戻るのが…。

「第十六試合！ 自らの正義を胸に！ ルパン逮捕に今日も行く！

銭形幸一！」

「逮捕だーっ！」

「続いては、ニンジンそっくりの“ピクミン”連れて！ 命令と引っこ抜くしかないぜ！ ピクミン&オリマー！」

「…ホントの事だけどさあ」

シヨンボリとしつつ、オリマーは指定の位置につく。

「構えっ！」

「ずいぶん小さい奴だなあ……」

「勝てそうにない……」

「始めっ！」

「早速ひっこぬ——うおっ！？」

始まったすぐに、フィールドからオリマーはピクミンを抜こうとする。

だが滑り込んで来た銭形に両足首を強く掴まれ、あっさりと身動きが取れなくなった。

「どおおおりゃあああああっ！！！！！！！！」

立ち上がった直後、勢いよくその場をメリーゴーランドの様に回転し始めた！

…速度は子供どころか、大人でも楽しめない速さだが。

「うわあああああああっ！！！！！！！！」

両足首を掴まれ、オリマーはされるがままとなっていた。

ただひたすら、これが早く終わることを祈るしかない。

「目が回るうううううっ！！！！ 怖い！！！！！！！！！！」

必死の叫びに、観客の誰もが哀れみの眼差しで、回転している二人

を見ていた。

だんだん酔ってきたオリマーが、もう諦めかけたその時。

何を思ったのか、銭形は両手をパツと離れた。

「え？」

解放されたと認識した頃には、オリマーは空中をかなりの速さで飛んでいた。

不運な事に、落下点は場外である事が目で分かる。

因みにピクミンがいない彼は、高く跳ぶ事すらできない。

つまり、復帰技が出来ない。

「…あ」

マヌケな声と共に、何も出来ないままオリマーはフィールド下に落ちていった…。

「場外。勝者、銭形幸一！」

「日本の警察をなめるなよっ！！」

腰に差してあった十手を取り出し、掲げるようにポーズを決めるのだった…。

第七話：第十三試合、第十六試合　ありえない大怪盗（後書き）

第七話、いかがでしたでしょうか？
更新遅くなってすいません…。

ご感想、ご意見をお待ちしております。
このキャラを戦わせたい、という意見もどうぞ！

第八話：第十七試合、第十八試合 悪魔と魔王（前書き）

大怪盗たちの戦いが見られた前回。
今回は、悪魔と魔王…？

第八話：第十七試合、第十八試合 悪魔と魔王

「第十七試合！ スマブラーの食いしん坊！ 別名、ピンクの悪魔！ カービー！」
「ポヨッ」

「続いては…最強のサイボーグ猫！ 別名、黒き悪魔！ クロ！」
「おっ！ オイラの番か！」

両者は意気揚々と、指定の位置に立つ。

「構えっ！」
「さあて、暴れんぞー！」
「勝つぞー！」

「始めっ！」

「いくぜえ！」

胸部を開いて腕を突っ込むと、ガトリングを左手に装着する。
狙いをカービーに定め、銃口を向けた直後に撃ちだす！
次々と弾丸が射出されてゆき、側面から薬莢が排出される。

「吸い込みー！」

助走し、口を大きく開く。

するとあり得ない事に、弾丸を“吸い込み”だした！

「なに！？」

思わず撃つのを止めてしまう程、クロは動揺した。

弾丸は一つ残らず、大きな口の中に吸い込まれてゆく。

そして、カービィの胃袋の中に全ておさまった。

「射撃は効かねえのかよ…！」

苦々しく呟きながらも、戦闘手段を変えようとする。だがそれよりも、カービィが剣を構える方が速かった。

「ファイナル！」

高く跳び上がり、顔を上げているクロを眺める。

そしてすぐに、空中から一気に降下する！

「カッターッ！！」

叩きつけるかの様に振り下ろした剣は、強く地面に激突する。

これによって生じた衝撃波が、空気を切り裂きながらクロに飛来した！

「っ！？ おわぁ！！」

当たったらヤバイと本能で感じとり、すかさず地面を蹴って跳ぶ。先ほど自分がいた場所を、衝撃波が通り過ぎていった。

「危ねえ…！」
「ハンマー！」

安心する暇はなかった。

木で出来たハンマーを持ったカービィが、後を追うように跳んできた為だ。

「おわっ…!!？」

身体を反らし、なんとかハンマーを避ける事に成功する。

そして空中に居続けられる訳もなく、クロはゆっくりと落下していく。

「もらったあ！ ストーンッ！」

これ待っていた。

ほぼ同時に降りてきているカービィは、岩の身体へと変身する。

そして先に着地し、真下にいるクロ目掛けて落下した！

「しまっ…!? うわあああああっ…!!」

絶叫と同時に、フィールドに地響きが鳴った…。

「やった〜!!」

煙の中、クロを押し潰したと思っているカービィは意気揚々と下を見た。

恐らくはペッタンコになっているだろう。

「…！」

だが、足元は想像していた状況にはなっていなかった。

「ぬぬぬぬ…！」

落下してきたカービィを、なんとクロは両手で受け止めていた！
相当な重量である為か、流れる汗がフィールドにポタポタと落ちる。

「おおおおおっ！！！」

気合の一声を発すると、石になった両足を掴む！
嫌な予感が、カービィによぎる。

「も、もしかして…！」

「その！ まさかだあっ！！！」

その場に強く足をおき、回り出す。

次第に加速し、目では二人の姿が見えなくなるまでになっていた。

「グルグルニャーだあああああっ！！！」

「ポヨオオオオオオッ！！！！？」

目が渦巻きになっているカービィを尻目に、回り続ける。
そしてある場所に狙いを定め、手の力を緩める。

当然の事ながら、放されたカービィは、その場所——“場外”へ落ちる。

無論、目の回っている状態では、この状況に対処できる筈がない。

「わあああああつー!!」

身体の重量が災いし、隕石のような速度で下へ落ちていく。
すぐに元の体に戻ると、急いで復帰しようとする。

だが、遅すぎた。

「ポヨオオオオオオ——ッ!」

復帰するには、あまりにも落ち過ぎていたのだ。
結局、カービィは復帰すること叶わず、場外へと落ちていった…。

「…場外。勝者、クロ!」

「ふう〜! 勝った勝った!」

「第十八試合! 管理局のエース・オブ・エース! 別名、白き魔王! 高町なのは!」

「魔王じゃな〜いっ!」

「続いて…ハイラルを狙う魔盗賊! リンクとゼルダの宿命の相手!
! ガノンドロフ!」

「……………」

指定の位置につくと、二人は睨み合う。

因みに、すでにバリアジャケットをなのはは装着済みだ。

「構えっ！」

「たかが女風情が魔王だと…？ 笑わせる」

「好きで呼ばれてるんじゃない！」

「始めっ！」

始まった途端、ガノンドロフは一気に距離を縮める。

「ふっ、一発で終わらせてやるわ！」

右腕に禍々しい、漆黒のオーラが纏わりつく。

一目で、危険なものだと誰もが気付いた。

「魔人、拳！」

これを勢い良く、なのは目掛けて打ち出した！

「っ！」

『Protection.』

咄嗟に展開されたバリアで、何とか初撃は防ぐ。

しかし強大な闇の力が加わった拳には、一瞬しか持たない。

見る見るうちに亀裂が入ったかと思えば、呆気なく碎け散った。

「レイジングハート！」

『Accel Fin.』

予測し、すぐに回避に移る。

足の外側に2枚、内側に1枚ずつ羽が生えた瞬間、空中を舞い、その場を高速で離れる。

「ちっ！」

力はあるぶん、ガノンドロフはそれほど速くはない。
故に仕方なく動きを止め、上空へと目を向ける。

「今度はこっちから！」

空中を漂うのはは、周囲に桜色の魔力弾を数個つくりだす。
淡く光る魔力弾は、静かに空を浮く。

「アクセルシューター！」

手を振ったのが合図なのか、それらが一斉に放たれた。
全部が異なる軌道で進み、ガノンドロフへと向かう！

「…ふ」

鼻で笑い、避ける体制も取らずに、ガノンドロフは両手を握り、仁王立ちをとる。

そうしている内に魔力弾は、身体中に次々と着弾していく！

「…」

だが痛みの表情どころか、微動だにすらない。
彼は、全て耐えきったのだ。

「嘘っ!？」

まさか耐え切ると思っていなかったのか、さすがのなのも愕然とした。

それも無理はない。

いかに牽制とはいえ、まともに全弾が直撃して無傷なのだから。

「お返しだ」

地面を強く蹴って跳び、なのはの正面付近に飛ぶ。
そしてゆっくりと左脚を後ろへと振る。

「裂鬼脚!」

凄まじい威力と速さの蹴りが、放たれた。

「っ!？」

あまりにも一瞬のことだった為、回避が間に合わない。

『Protecti——』

そしてバリアが展開されることもなく、何の障害もなく脇腹に左脚がめり込む!

「がっ!!?」

吐き気がこみ上げてきたが為に、思わず手で口を押さえる。
バリアジャケットの防御力も、この蹴りの威力にまるで意味をなさなかった。

「堕ちろ…！」

痛みに悶えるなのはに、無情にも両手を重ね合わせ、振り下ろす！

「っ！？」

声を出す暇も、そして背中中の痛みを感じる間もなく、フィールドに叩きつけられた…。

「…ふっ、所詮はこの程度か」

埃と傷だらけで倒れているのはを、着地したガノンドロフは見下す。

所詮は小娘。

後は、マスターの勝利宣言を待つだけ…。

「っ！？」

そんな思考を止めざるを得ない状況になった。

突然、自分の周りに桜色をした魔力の鎖が発生したのだ。
いくつも現れた鎖に、抵抗する間もなく縛り上げられる。

「ぐっ…!？」

壊そうと腕や脚を動かそうとするが、ピクリともしない。
信じられないほど、頑丈にできていた。

「…チーンバインド、成功だね。レイジングハート」
『Yes・master.』

聞こえた声に反応し、ガノンドロフはすかさず首を動かした。
視線の先には、気絶していた筈のなのが、脇腹を押さえながら立ち上がっていた。

「貴様…！ 気絶していなかったのか…！」

なのはの耐久力を甘く見過ぎていた事に、心の中で舌打ちをした。
だが、もう遅い。

「さっきの攻撃のお礼…」

怒りが含まれる言葉と共に、レイジングハートの矛先に膨大な魔力
が集まり始める。

肌でも感じられる強大な魔力――。

「…!!!!」

気づかぬ内に、ガノンドロフは額に汗を流していた。
先程までの魔力弾とは、比べ物にならないと察したのだ。

「魔王らしく！ たっぷりしてあげる！」

宣言と同時に、カートリッジが排出される。
重みのある音をたて、フィールドに落ちた――。

それが、発射の合図だった。

「スターライトッ！ ブレイカアアアアアッ！！！」

溜められた膨大な量の魔力が、ガノンドロフに放たれた。

巨大なビームと見間違えても不思議ではないそれは、一直線に突き進む！

「……！」

鎖をどうする事も出来ず、ガノンドロフはただ、桜色の閃光を睨み続けた。

信じられない程の殺意を込めながら。

「おのれえ……！」

避けられる訳もなく、当然のように桜色の閃光に飲み込まれる。

この光の中で、身体中に痛みを受け続けながらも、憎しみが止まることはない。

逆に、火山のように噴き出していた。

「高町……っ！　なのはあああああっ……！！！」

憎しみをこめて、相手の名を叫ぶ。

これを最後に、大きな爆発が巻き起こった…。

煙が風で吹き飛ぶと、観客席から見たのは二人。

激しく息切れをして、今にも倒れそうな状況にあるのは。

そして、気絶してフィールドに倒れ込んでいるガノンドロフの姿だった。

「…勝者、高町なのは！」

「っ、強かつ、た…」

痛む身体を引きずりながら、フラついた足取りで控え室へと戻るのだった…。

第八話：第十七試合、第十八試合 悪魔と魔王（後書き）

第八話、いかがでしたでしょうか？
お待たせしてすみません…。

しかも二試合しか書けなかった…うう、すみません。

次回もお楽しみに！

尚、ご感想、このキャラを戦わせてといつご意見などございましたらどうぞ！

お待ちしております！

第九話：第十九試合、第二十一試合 同作品での大バトル！（前書き）

前回、悪魔と魔王の二つな同士の戦いだった前回。
今回は、同じ作品同士の戦い…！

第九話：第十九試合、第二十一試合 同作品での大バトル！

「第十九試合！ スターフォックスのリーダー！ その名の通り狐の姿！ フォックス！」

「余計な御世話だよ…」

「続いて… スターフォックスのパイロット！ 見た目通り素早いぜ！ ファルコ！」

「俺か！」

片方は少しシヨンボリと、もう片方は意気揚々と配置につく。

「構えっ！」

「フォックス！ そろそろどっちが強いか決めるぜ！」

「ああ！ 望むところだ！」

「始めっ！」

開始直後、両者は愛用のブラスターを腰から抜く。

一瞬で相手に狙いを定め、同時にトリガーを引いた。

「っっ！」

互いの銃口から、一筋のビームが射出される。

擦れ擦れで両者の頬をかすめ、傷口から微量の血が流れる。

絶対に死なないとはいえ、多少の血は出るようだ。

「さすがだな、ファルコ」

「そっちな、フォックス」

一陣の風が吹く中、ほくそ笑む二人は微動だにしない。
どちらも隙を窺っているのだ。

「……！」

意を決し、ファルコが目にも止まらぬ速さで動き出す！

近づき、左足で回し蹴りを放つ。

後方へ飛んで避けたフォックスを追いかけ、今度は正拳突きを打ちだす。

「おっと！」

続けてきた正拳突きを受け止めたと同時に、屈みこむ。
そしてファルコの片方の足に目掛け、右足で払う！

「なっ！？」

左右にバランスを保てなくなり、体制が大きく崩れた。
これは、最大の隙が出来た瞬間だった。

「もらった！」

その隙を逃すはずもなく、頬に、顎に拳を打ち込んでいく。
後ろに仰け反り、そのまま吹き飛ぶ。

しかし、すぐに体制を立て直したファルコは、唾を吐き捨てる。血が混じっており、口内が切れたことを表していた。

「調子に乗ってんじゃねえ！ ファルコビジョンッ！！！」

助走をつけて走り出したかと思えば、消えた。

そうかと思えば、薄く透けたファルコが、幾つも現れたした。

残像だ。

辺りには残像のみが見えるだけで、他には何もない。

「フォックスイリユージョンッ！！！」

同じく、フォックスも走り出した瞬間に、観客の視界から消えた。すると今度はフォックスの残像が、幾つも現れ始めた。

もはや観客達の視界には、残像以外なものも見えない。完全に、姿を消していたのだ。

「ぐ…！？」

「いつてえ…！」

突然、何の前触れもなくそれは起きた。

フィールドの一画から発した声で、やっと両者を目視できた。二人の頬には、互いの拳が炸裂していた。

腫れた頬を押えながら、同時に後ろへ一歩下がる。

「はあ、はあ……！」

「ファルコ、そろそろ、決着をつけるか？」

荒い息遣いが続く最中、フォックスの言葉にすかさず頷く。
どちらも、体力的に厳しい現状。

早急に、決着をつけたようと動く。

「「おおおおおおおおおつ……！」」

全身に、発生させた真つ赤な炎を纏わせる。
鎧のように、身体を隙間なく包みこむ。

その姿はまるで、鳥のようであつた。

「「ファイアアアアアアッ……！」」

このまま突撃し、目の前にいる相手に激突した！
炎と炎が、全身と全身が、最大の力でぶつかり合う。

「「おおおおおおおつ……！！！！！！！」」

熱気を放出しながらの激突に、観客達は息をのんだ。

どちらも苦しい表情を浮かべながらも、退くどころか逆に前へ突き進む。

だがほぼ互角の為か、どちらの炎も、最初ほどの勢いから小さくなつていった。

「ファルコ…！ 勝たせてもらっぞ！」

だが、勝負は意外な形で終わりとなった。

突然にフォックスが、炎を消すと同時に後方へと下がったからだ。

「なにっ！？」

予想外の事態に止まる事ができず、ファルコはそのまま前方へと突き進む。

無論、時間が経ってしまった為か、進んだ瞬間に炎は完全に消えた。つまり、今は威力が衰えた状態。

「てめえ…！ まさか…！？」

この状態になるのをフォックスが待っていたのだと、今さらながら気がついた。

もっと早くに気づいていれば、対処はできただろう。

だが、気付くのが遅すぎた。

「終わりだっ！ フォックスイリユージョン…！！」

残像を作りつつ接近し、容赦なく飛び蹴りを放つ。

高速で入った蹴りに、難なくファルコの意識は遠のいた…。

「…気絶を確認。勝者、フォックス！」

「俺の作戦勝ちだったな！」

ブラスターの点検をしながら、フォックスは呟くのだった…。

「第二十試合！ 伝説の剣“ファルシオン”を手に戦う王子！ マルス！」

「さあ、始めましょう」

「対するは…神剣“ラグネル”を片手でふるう豪腕の傭兵！ アイ
ク！」

「…勝つ」

指定の位置につく、互いに鞘を握る。

「構えっ！」

「いくぞ、マルス」

「全力でやらせてもらいますよ」

「始めっ！」

一撃でケリをつける。

鞘からファルシオンを抜き、高々と構える。
そして最大の技を出すために、力を込めて握る。

マルスと同じ考えなのだろうか。

鞘からラグネルを抜いたアイクは、それを水平に構えた。
直後、燃え盛る炎が、刃に纏った。

「……………」

風の音さえも聞こえるほど、フィールドは静かになる。

しばらく続いていた時、一人の観客の唾を飲む音が、聞こえた。
それを引き金に目を見開き、二人は一気に駆け出した！

「必殺つ！！」

「大っ！！」

ほぼ同じ速さの剣撃。

そして、この剣での勝敗はすぐに決した。

燃え盛る刃のラグネスが、ファルシオンの一撃を弾いた。
そのまま空中に向けて、マルスを斬り上げる！

「天っ！」

後に続いて跳び上がり、ラグネスを。
的確な斬撃で、落下中にもアイクは斬り続ける。

「空っ！！！！」

とどめと言わんばかりに、燃え盛るラグネスを思い切り叩きつける！
そのまま力任せに、声すら上げられないマルスと共に急降下した！

「おおおおおおおっ！！！」

フィールドに衝突したと同時に震動が響き、煙が舞う。

「…勝った」

煙が晴れた直後、埃を払いながらアイクは立ち上がる。

視線の先には、亀裂の入ったフィールドに、気を失ったマルスの姿があった。

「勝者、アイク！」

「出直してくるんだな、マルス」

マントをたなびかせながら、アイクは控え室へと戻るのだった…。

「第二十一試合！ オネット出身の超能力者！ P S Iは何でもござれ！ ネス！」

「頑張ろうかな！」

「対するは…気弱な性格の超能力者！ それでも強い心の持ち主！ リュカ！」

「が、がんばろう…!」

ワクワクするネスとは対照的に、オドオドしながらリュカは指定の位置に立つ。

「構えっ!」

「全力でいくよ! リュカ!」

「う、うん…!」

「始めっ!」

「PKファイアー!!」

「えっ!? うわっ!? PKファイアー!!」

始まった途端、自分に向かってくる巨大な火柱。

慌てて自身の発生させた、火柱で打ち消し、相殺させる。

余波で熱気が散布するが、構わずネスは攻撃を続ける。

「PKフリーズ!!!」

冷気を纏った巨大な氷が、手から放たれた。

もちろん、これを黙って受ける気はない。

「くっ! PKフリーズ!!!」

同等の氷を衝突させ、再び相殺する。

会場中に、肌寒くなる冷気が充滿した。

「PKサンダー!!!」

ほぼ同時に、両手に溜めた稲妻を、それぞれが相手に向けて放つ！
雷同士が衝突しあい、弾ける様に消滅した。

今度は微量の電気が、辺りにまき散らされる。

「今度はコレだ！」

「うわっ!？」

接近してきたネスが繰り出したバットを、取り出した木の棒で受け止める。

だが貧弱な木の棒では、重いバットの一撃に耐えられなかった。

「うわああああっ!!!？」

木の棒は容易く折れ、木屑となった。

障害がなくなったバットは、そのまま脇腹にめり込む！

「ヨーヨー!!」

脇腹を押さえるリュカに、冷酷にも追撃を止めない。

ヨーヨーをまるで手足のように巧みに使い、身体中に叩きつける！

「う、うう…! (だ、ダメだ…やっぱりネスは強いや…)」

地面に突っ伏したりリュカに、諦めが心を占める。
自分は傷だらけ、対するネスは無傷。

もはや勝敗は歴然――。

「…リユカ、諦めるの？」

「え…？」

そんな思考を中断し、顔をあげる。

リユカの視界に映ったのは、悲しげな表情だった。

「君はあの時の様に、また諦めてしまうの？」

「っ！」

この言葉にリユカは、ネスと初めて会った“あの時”の事を思い出す。

ポーキーに襲われた事、ワリオにフィギュアにされかけた時の記憶が。

あの時も怖がって何もせず、ただ震えていた。

戦いもせずに、諦めていたのだ。

「君は強い心を持っている…そして何より――」

続けて喋ろうとした直後。

「諦めるなリユカ！」

「テメエはあの時にこの俺様に勝ったんだぞ！ 諦めてんじゃねえ！」

観客席からの大きな声援で、遮られた。
それにリュカがゆっくりと首を動かす。

視線の先にいたのは、見慣れた二人の仲間だった。

ポケモントレーナーとワリオ。

叫ぶその姿は、遠くからでも必死と窺えた。

「今の君は、応援してくれる仲間もいるんだよ？ それでも諦めるの？」

「……………」

何も言わずに立ち上がるとリュカは、両手に力を溜め始める。
微笑むと、ネスも後に続いて力を溜め出す。

「やっぱり、諦めるわけないよね」

「うん…！ 僕は諦めない！ ネス！ 君を倒す！」

今までの弱気な表情がウソのように消え、諦めるという考えもなかった。

逆に、諦めないという想いが彼にはあった。

「PKスター…！」

晴れている筈の空に、幾つもの“ある物体”が集まる。
光り輝くそれらは、次々と集まっていく。

天のものに気が付いた殆どの観客が、息をのんだ。

「「ストームッ……!!」」

二人が両手を下ろした瞬間、それらは来た。

例えるなら雨……いや、嵐だった。

“PK スター ストーム”

その名の通り、数え切れないほどの“小さな星”が、フィールドに降り注いだのだ。

瞬く間に降ってきた星の衝突で、フィールドに凄まじい衝撃が起こる。

星の爆発や、それによって生じる砂煙――。

観客席からは、もう何も見えなかった……。

星の嵐がようやく、おさまった頃……。

煙の中に、一人の影が映っていた。

数秒後に晴れると、その影の正体はつきりとした。

「……………」

「はぁ、はぁ……」

息遣いが、亀裂の走るフィールドに響く。

立っている人物を確認したマスターは、息をいっぱい吸って叫んだ。

第九話：第十九試合、第二十一試合 同作品での大バトル！（後書き）

第九話、いかがでしたでしょうか？

次回も、このペースで投稿できるように頑張りたいと思います。

ご感想、このキャラを戦わせてというご意見などございましたらどうぞ！

ぜひ、お待ちしております！

次回もどうぞ、お楽しみに！

第十話：第二十二試合、第二十三試合 二人のサイヤ人（前書き）

スマブラメンバー同士の激しい戦いが繰り広げられた前回。
今回は、遂に登場のサイヤ人…。

第十話：第二十二試合、第二十三試合 二人のサイヤ人

「第二十二試合！ その強さはまさに大会ー！ 地球育ちのサイヤ人！ 孫悟空！」

「おっ、オラの番だ！」

「対するは… スターフォックスの因縁の相手！ スターウルフのリーダー！ ウルフ！」

「ふっ、蹴散らしてくれる」

指定された位置に立ち、すかさず構えを取る。

「構えっ！」

「ここで貴様は終わりだ」

「それはわかんねえぞお？」

「始めっ！」

「雑魚がっ！ 消えろ！」

瞬時にウルフは腰に差していた、クローブラスターを手にとる。狙いを定め、悟空の額に銃口を向け、トリガーを引く！

「でやあ……！」

しかし悟空は、飛来するビームを避けようとはしなかった。理由は簡単、避ける必要が欠片もないからだ。

右手でそれを払う、明後日の方向にビームを弾き飛ばした！

それは観客席に張られているバリアに衝突し、消滅した。

「なにっ!？」

「おーい、もうちょっと本気でやってくれ」

もつと戦いを楽しみたい悟空は、ただ単に本気でやってほしい。その為にこう言ったのだ。

しかしその言葉は、ウルフにとっては挑発に等しいものだった。

「き、貴様…ふざけるな!!!!」

その発言に怒り狂うウルフは高速で迫り、次々と攻撃を仕掛ける！

時には腹を、時には顔を自身の鋭利な爪で狙う。

顔に来れば首を少し動かして避け…。

肩に来れば身体を逸らす…。

たったそれだけの小さな動きだけで、その場から動かずに避け続けたのだ。

「ちっ！　これでどうだ！　ウルフィリュージョン!!!」

フォックスやファルコと同様に、残像が出来る程の速さで走り出す！

一瞬で背後に回り、爪で斬り裂こうと構える！

「っ！？」

だが目の前にいた、背を向けていた悟空の姿はなかった。
突然に、視界から消えてしまった。

「馬鹿なっ！？ どこだ！？」

「ここだ」

「！？」

慌てて後ろを見ると、腰に両手を当てて悠然とたたずむ悟空の姿だった。

まるで、最初からそこにいたかのように。

「貴様…！ いつの間に！？」

「おめえがオラの後ろに回り込んだ瞬間に、おめえの後ろにオラも回り込んだ」

返答の内容に、ウルフは愕然とした。

この言葉が本当であるならば、自分の視覚では捉えられない速さで移動し――。

なお且つ、自分の動きを視覚で判断できたという事なのだから。

「…ぐっ！ 俺様より速く動ける…だが、それがなんだあっ！！！！」
「？」

叫んだ直後、空から戦車の様な物が降ってきた。

ウルフの切り札である、“ランドマスター改”が呼び出されたのだ。

「これで終わりにしてくれるっ！」

乗り込んだウルフは操縦席に座って操作し、主砲の銃口を悟空に向ける。

フルチャージでなければ倒せないと判断したのか、エネルギーをチャージし始める。

「おお、気が溜まり始めてるぞお！ やつと面白くなりそうだ！」

両手を交差させて、悟空は一気に力を体外へと解き放つ。すると次の瞬間、変化が起きた。

悟空の髪が、金色となった。

瞳の色も変わり、身体の周りは金色のオーラが纏っていた。

これが悟空が力を開放した姿、“超サイヤ人”である。

『あの〜、ここで説明しても〜…』

「……………」

説明をしようとするマスターだが、観客たちは返事をせず目線で告げた。

空気を読めと。

はい、すいません

謝罪し、タメ息をついてマイクを切った。

…それでも神か？

そんなやり取りを気にせず、悟空は両手首を合わせ、後ろに持っていき構える。

手の中に黄色の光が溜まり始め、次第に大きくなっていく。

「か、め、は、め……」

「喰らえええええええつ!!!!!!」

「波あああああああつ!!!」

エネルギーが満タンになった途端、主砲から巨大な白き光が発射された！

それと同時に、悟空も両手を前に突き出す。

手の中で溜まっていた青白いエネルギーが、勢いよく飛び出る！

二つの光は衝突し、凄まじい衝撃を出しながらその場で静止した。フィールドが挟れていくが、そんなのはお構いなしだ。

「な、何だと！？ この俺様のランドマスターの主砲と互角だと！
?!?!」

操縦席で冷や汗を流し始めるウルフだが、無理もない。

このランドマスター改は、通常のランドマスターよりも性能、火力

も優れている。
それが生身の人間と互角である事は、ウルフにとっては信じられない事実だった。

「はあああああああつ！！！！！」

さらに信じられないことは続く。
気合の叫びをあげた悟空に反応するかの様に、青白い閃光は威力を増す。

「馬鹿な…！ 馬鹿な馬鹿な…！！？」

限界まで溜めた主砲を、押し返している。
信じられないことばかりが続く。

「この俺様が…！！？ フォックスと戦う前に！ 負けるというのかあ！？」

目前まで迫る閃光を呆然と眺めながら、ウルフは叫び続ける。
同時に、主砲から放たれた光が、完全に掻き消された瞬間でもあった。

「馬鹿なあああああああつ！！！！！」

この言葉を最後に、ランドマスター改の全体は飲み込まれた。
金色の閃光によって…。

煙が晴れ、フィールドを見た観客が見たのは、かめはめ波の影響で

出来あがった巨大なクレーター。
さらにクレーターの中では、ランドマスター改の残骸とウルフが倒れていた。

少し離れた場所で、超サイヤ人から元に戻った悟空の姿だった。

「…勝者、孫悟空！」
「いや、オラ中々楽しめたぞ！」

「第二十三試合！ パルテナ親衛隊の隊長！ 翼はあるけどあんまり飛べない！ ピット！」
「言わなくていい！」

「対するは…サイヤ人の王子でエリート戦士！ 孫悟空とは永遠のライバル！ ベジータ！」
「ふんっ…」

指定の位置に立ち、二人は身構える。

「構えっ！」
「いくぞ天使野郎」
「天使野郎いうな！」
「始めえ！」

「さっきの人と同じサイヤ人っていう種族…だったら！」

意気込んで天を仰いだ。

まるで、誰かに祈りをささげるかのように。

すると突如、天空に眩い光と共に、女神が現れた。

神々しさと美しさ…この人物が“女神パルテナ”であると理解できる者は少なかった。

観客席の殆どが、その姿に心を奪われた。

「いけえっ！」

さらに天から、金の鎧をまとった大量のイカロス達が次々と飛来する。

そして標的であるベジータを目掛け、突撃を開始した。

恐れる事もなく、勇敢とも無謀ともとれる行為を。

「ほお…」

避ける体制もとらずに、ベジータは両腕を組んだまま、態度から察するに、全くの余裕だ。

その間に猛烈なスピードで接近してきたイカロス達が、次々と激突していく！

一人、二人、三人と…息をつかせる暇もない。

数十人のイカロスの強烈な突進を受けた為なのか。
屈みこむベジータは、そのまま動かない。

倒れていくイカロス達は気の毒だが、仕方がない。

「やった…！」

喜びの声を上げたと同時に、女神パルテナが、イカロス達の姿が一瞬のうちに消えた。
時間が切れたのだ。

これほどの攻撃を喰らったのなら——という考えは。

「くくくっ…中々いい攻撃だったぞ」
「なっ！？」

何事もなかったかの様に起き上がるベジータによって、粉々に打ち砕かれた。

ダメージはまるでないようだ。

「まあ、少しは楽しませてもらったんだ…俺様も少し本気でやろう」

そう言って力むと、ベジータの姿が変わった。

金色のオーラと金髪。

先程の悟空と同様、超サイヤ人となった。

「これで終わりだ…天使野郎」

超サイヤ人となった彼は、右手を前に突き出す。
凄まじいエネルギーが、彼の手のひらに集まっていく。

「…な、何だ！？」

信じられないような威圧感とエネルギーによって、ピットは動く事が出来なかった。

そして膨大な量が溜まった瞬間…！

「ビックバンッ！ アタアアアアクッ！！！」

巨大な青き閃光が、ピットに向けて放たれた！

星一つを軽く消し飛ばすほどの威力を持った閃光が。

「あ、ああ…！」

その閃光の速さは異常であり、避けることは不可能だった。
恐怖の顔つきで、それに飲み込まれるしかなかった…。

閃光が収まり、大爆発して大きなクレーターを残したフィールド。
傷と埃だらけになって倒れているピット…天使の証である翼の羽根が、辺りに散らばっていた。

「…勝者、ベジータ！」

「ふん…」

超サイヤ人から元に戻ると、
颯爽さっそうと観客席へ戻って行った…。

第十話：第二十二試合、第二十三試合 二人のサイヤ人（後書き）

第十話、いかがでしたでしょうか？

悟空をお待ちしていた皆さん、大変お待たせしました！

ご満足いただけたのなら幸いです。

感想、このキャラ同士を戦わせたいというご意見をお待ちいたします。

次回もお楽しみに！

第十一話：復讐のサイボーグ型デジモン（前書き）

サイヤ人達の激しい試合が終わった前回…。
第二十四試合が始まるうとしている頃の話…。

第十一話：復讐のサイボーグ型デジモン

――訓練室

ここは天空スタジアムの施設の一つ、訓練室。
大乱闘のない日にでも、訓練の出来る様に作られた部屋。

第二十四試合が始ろうとしている頃そこで…。

「はああああっ！」

「てやあああっ！」

「甘いぞ二人とも！」

エリオに小太郎、そしてレオモンが戦っていた。
本気で戦い合っているのが、覇気で感じ取れる。

「ルフト！ メッサーツー！」

周囲の空気を利用して、空気の刃を生み出された。

通常のどんな刃よりも鋭いであろうそれは、レオモンに襲いかかる！

「甘い！」

すかさず気で作りだした獣王拳で相殺する。

余波の衝撃が身体を押すが、そんなものでは動かない。

「はっ！」

「うわっ！」

薙ぎ払うようにきた右腕を避ける為、エリオは慌てて屈みこむ。頭上を通り過ぎたのを見計らい、すかさず反撃しようと膝を伸ばした。

「がはっ！？」

この立ち上がる際の際を突かれ、正拳突きが顔面に炸裂した。気付けば身体は宙に舞い、吹き飛んでいた。

「次は俺やつ！ 犬上流・空牙！」

すぐ後ろから、戦いを待っていた小太郎が気の弾を打ち出す！攻撃のためではなく、あくまで牽制のためだ。

「はっ！」

対してレオモンは腰に差してある愛用の妖刀、“獅子王丸”を抜く。瞬時に自身へ向かってくる気弾を、あっさりと切り捨てた。

「もろた！」

彼にとって、気弾はレオモンに近づく為の囹。相手が気付く前に、縮地で接近する！

「させんっ！ 獣王拳ッ！！」

だが歴戦の勇者であるレオモンは、素早く状況を判断した。攻撃を阻止するために、自身の必殺技が飛び出る！

「ちっ！？」

予想以上の行動の速さに、思わず舌打ちが出る。
すぐに体制を変え、すぐにその場からワンステップ横に動く。

「ふんっ！」

「なっ！？」

後を追いかけてようとはせずに、獅子王丸をブーメランの様に投げ飛ばす。

このすぐ後に、レオモンは駆けだす！

「てりゃあっ！」

迫る獅子王丸を、力の限りに上へ蹴る。

回転しながら飛んでいき、何とか事なきを得た。

だが、それも束の間。

必殺技である獣王拳が、小太郎の目前にあった。

「しまっ！？」

獅子王丸に気を取られ過ぎた、と気付いても時すでに遅い。
大きな衝撃が起こり、彼の背中に地面の感触があった。

「私の勝ちだな、二人とも」

「クソッ！ 負けてもうたっ！」

「うう…まだ、訓練が足りません」

立ち上がりながら、悔しそうな表情を二人は浮かべる。

なぜ彼等が戦っていたかと言えば、それは…訓練。

クレイジーに訓練室の存在を聞かされた二人は、迷う事無くここへ到達した。

そして先に修行をしていたレオモンに頼み、こうして模擬戦をしていたのだ。

「もっと強くないと、キャロを守れない…！」

「もっと強くならな、東方不敗のジジイに勝てん…！」

口々に目標を言ってゆく二人を見守りながら、レオモンは確信していた。

近い将来、彼等はずっと強くなると。

「焦らずとも、君達は強くなれる。修行を欠かさなければな」

優しさの混じった言葉に、エリオと小太郎は嬉しそうに笑った。

「はいっ！」

「おうっ！」

力強い返事に、レオモンは安心したような表情を浮かべる。
そしてもう一度、戦おうとした時だった。

「おいハチマキ女！ とつと案内しやがれっ！」

「わ、分かってますって！」

外から、二人分の会話が聞こえた。
そう思いきや、唐突に訓練室の扉が開く。

「スバルさん！」

扉から姿を現したのは、スバルだった。
身体は、傷があつたとは思えないほど、完治していた。

マスターの治療のお陰だろう。

「エリオ？ 修行してたの？」

「スバルさんもですか？」

陽気に会話をしている最中、 とも自動扉が開いた。

注目が集まると、そこには握り拳を作ったカズマがいた。
薄ら笑っているところから、彼の機嫌はいいようだ。

「さあハチマキ女！ 喧嘩してえつつたのはテメエだぜ！ さっさとやろうぜっ！」

「喧嘩じゃなくて模擬戦ですって！」

どうやら、もう一度カズマに挑むために、ここまで連れて来たようである。

だが、彼にとっては模擬戦でもなんでもなかった。

“戦い”は、全て喧嘩だ。

「喧嘩は喧嘩だ。 テメエが売った、俺が買った。 だからテメエをボ

「る！」

部屋の壁が、床の一部がえぐれ虹色の粒子となる。
瞬く間にそれらは、第二形態のシエルブリッドを形作った。

戦う理由は、実に単純明快だった。

「徹底的にだっ！！！」

直後、装甲からネジが弾け飛び、開いた手甲に光が集う。
彼の意志に応えるかのように。

続いて、呆れたような感じであつたスバルも動いた。
一瞬でバリアジャケットを展開し、構えを取る。

レオモン達がこれから始まるであろう戦いに、目を開いた。

「それはあちしも参加していいのかしらあ？」

突如に聞こえた見下すかのような声が全員の耳に入った。

それは、壁が粉碎されたと同時に。

壁の欠片が辺りに飛び交い、煙が舞う。

「「「「「！？」」」」」」

一斉に顔を壊れた壁に向けた。

動きは、息ピッタリだった。

煙に映る影によって、何者かがこちらに来た事は明白だ。息をのんで全員、煙が晴れるのを待った。

晴れた場所が視界に入ったのは、サル…しかし、ただのサルではなかった。

顔にサングラス、胸には“最強”の二文字、腰には悪趣味なクマのストラップ。

最後に銀色の体であった事から、至る所が金属だと一目で分かった。

「貴様は…！ “メタルエテモン”！？」

驚きの混じった声で、レオモンはそのサルの名を呼んだ。自らの名を聞き、メタルエテモンはほくそ笑んだ。

「なぜ、貴様がここに！？」

「それはあちしが知りたいわ！ 気付いたらここにいたんだし！」

周りには、会話の意味がよく分からない。

しかし、相手が放つ殺意により、はっきりと分かる。

こいつは敵だと。

「でもどうでもいいのよっ！ あんたに復讐できるなんてラッキーだわ！ あの時のお礼をたっぷりしなくちゃね！」

より強い殺意を、肌で感じられるまでに曝け出す。
そうして、メタルエテモンは戦闘態勢を取った。

「レオモン！ ワープ進化あ！」

戦闘態勢を取った瞬間、レオモンは光に包まれる。
光の中で四足歩行へと変わり、鋭い牙が生えた。

「サーベルレオモン！」

光の中から飛び出たのは、究極体であるサーベルレオモン。
この状態でなければ、奴には勝てないと分かっていたからだ。

「レオモンさん！ 手伝います！」

「俺もやつ！」

「あたしもっ！」

「あのサル野郎……！ 喧嘩の邪魔するたあ、気に入らねえ……！」

残りのメンバーもただ見ている筈もなく。
意気揚々と、戦闘体制をとった。

「へえ？ ただ人間ってわけじゃなさそうね？ でもあちしの敵じゃないわ！」

「なめんなっ！ サル野郎おっ……！」

風車を回転させ、前へと突き進む。
大きく振りかぶったシエルブリッドを、ムカつく奴に打ち込む！

「ナンバーワン…パァーンチッ！」

拳同士が衝突し合った瞬間、爆発的な衝撃が起こる。
床の表面を、消し飛ばすほどのものが。

「ぐわあっ!？」

「おっとお!？」

互いに宙を舞った両者は、重力に従って地面に足をつける。

「もらった! デイバインツ! バスタアアアアッ!！」

その直後、着地したばかりのメタルエテモンを、青き閃光が飲み込んだ。

無論、撃ったのはスバルだ。

前もって魔法陣を展開し、両手で魔力を練り上げていたのだ。
そしてそれを、即座に撃ち込んだのであった。

「やった!」

「いやまだだ!」

奴の事をよく知っているサーベルレオモンには分かっていた。
あの攻撃では、倒せないと。

「…何かしたの今?」

煙が晴れて全員の目に映ったのは、無傷で立っているメタルエテモ

ンの姿だった。

怪我どころか傷一つない姿であった。

「嘘っ!？」

「そ、そんなっ!？ スバルさんのデバインバスターがまるで効いてない!？」

壁ですら軽く破壊できるデバインバスターが直撃して、無傷。
この事に、威力を知っている二人は冷や汗をかいた。

「無駄よ。あちしの身体はクロンデジゾイドでフルメタルにしてあるのよ!？」

“クロンデジゾイド”…。

アグモンやレオモンの生まれた世界、デジタルワールドに存在する
強固の金属。

並の攻撃では壊すどころか、傷をつけることすら敵わない究極の代物。

「それがどうしたあっ!」

そんな事はずゆ知らずに、縮地で一気に懷に飛び込んだ小太郎が拳
を打ち出す!

金属にぶつかった時に発する音が辺りに響き…。

「いてえっ!？」

赤く腫れた手を押さえ、小太郎がのたうち回った。

「あらあ？ 非力ねえ？」

フルメタルのボディに対して、小太郎の拳はあまりにも非力だった。攻撃する筈が、逆に手痛い一撃をもらってしまったのだ。

「はあああああっ！」

魔法陣を展開し、魔力をチャージをしていたエリオは走り出す！ 走った際にストラダーからカートリッジが、音をたてて落ちる。

「スピア！ シュナイデン！！」

隙だらけのメタルエテモンの腹部に、思いきり突いた！
見事に、金属の折れる音が響き渡る！

…それがストラダーの折れた音だと判断するのに、時間を要した。

「なっ！？」

「あんたもしかして馬鹿あ？ あちしが斬撃なんて喰らうわけないでしょう！？」

先端が粉碎しているストラダーを、ただ呆然とするしかなかった。隙だらけになったエリオに、相手が大人しくするわけなかった。

「お返しよ！ ヘビーマン！ キーック！！」
「がはっ！？」

強烈な回し蹴りを腹部に喰らい、エリオは大きく空中を飛んだ！

しかしすぐに空中で体勢を立て直し、着地してメタルエテモンを睨む。

「ぐっ…！」

「エリオ！ 大丈夫か！？」

「大丈夫です…！ クーガーさんの蹴りと比べて、大した事はないので」

誰に比べられたかは、メタルエテモンには分からない。
だがそれは、挑発と言っても差支えなかった。

「ムツキー！ 生意気なガキね！ だったらもう一発お見舞いしてあげるわ！」

大した事ないの一言に怒り狂い、挑発したエリオに向かって突撃を始めた！

「テツメエツ！」

「リボルバー！ キャノン！」

妨害する形で正面から、カズマとスバルが平行に並んで追撃に向かう！

「邪魔よっ！ ラリアットオツ！」

それに対して、両腕を伸ばした状態でさらに速く走りだす！
ものの見事にラリアットが首に入った！

「ぐおあっ…！？」

「がはあっ…！？」

もろに首に入っただけに呼吸が出来ないのか、苦しげな表情を浮かべる。

痛みと咳き込みが襲う中、メタルエテモンは嫌味な笑みを浮かべる。

「あゝら、大変そうねえ」

「もろたで！ このサルツ！」

不意打ちで頭に、踵落としが浴びせられた！

だがやはり、ダメージは放った小太郎本人へといった。

「あんたも邪魔よっ！」

頭に接触する足を持ち、そのままグルグルと振り回しだす。

ダメージはないとはいえ、邪魔する者は鬱陶しかったのだ。

「があああああつ！！！！？」

「はははっ！ いいザマねえ！」

「このクソだれえっ！！！」

痛みを無視して起き上がったカズマは風車を回し、報復にかかる！
しかし予期していたのか、金歯が見えるほどの笑みを浮かべた。

「はい受け取って！」

「うおっ！？」

振り回していた小太郎を、突進してくるカズマに投げ捨てた。

「なにっ！？」

慌ててシエルブリッドの向きを無理やり変え、小太郎に攻撃がいかない様にした。

だがそのために、ぶつかって倒れてしまう事になった。

倒れ込む二人を無視し、今度こそエリオに向かう。

「うつ…！」

「逃げるエリオ！ インフィニティアローツ…！」

時間を稼ぎ為に、サーベルレオモンは迎え撃つ。

たてがみを逆立せ、毛を矢のように何十本も連射する！

「だからあ、そんなん効かないって言ってるでしょう！？」

避ける体制を取らずに胸を張り、余裕の態度で構える。

次の瞬間に毛が当たり続けるものの、何の効果もなかった。

「くっ！」

「お返しのフルメタルヒップアタック！」

金属の尻が、避けるのが遅れたサーベルレオモンの胴体にヒットした！

「ぐおわっ…！」

速さが重視である故に、防御力は限りなく低かった。

強烈な一撃に、あえなく膝を折って倒れ込む。

「ふふふっ！ さあて、これで終わりよ！」

天に人差し指を向けた途端、天井を黒き黒雲が埋め尽くした！

「やめろーっ！」

「あー、うつさいわね！」

振り返る際に裏拳を叩き込み、後ろから来たエリオを黙らせる。

赤く腫れた頬を押さえつつ、立ち上がろうとするが、失敗して倒れ込む。

「気を取り直していくわよっ！　ダークスピリッツデラックスウー！！！」

もはやエリオは眼中になかった。

今あるのは、サーベルレオモンに対する復讐のみ。

黒雲から、一筋の黒き稲妻が発生した。

倒れ込むサーベルレオモンへと、真っ直ぐに落ちていく！

「レ、レオモンさん……！」

「あ、あかん！」

駆けだそうとしたが、出来なかった。

誰もがダメージを受け、起き上がろうとしているところなのだから。

「間に合わないっ！」

「クソがあ……！」

怒りの籠ったカズマの叫びが響く。

黒き稲妻が、サーベルレオモンに落ちかけた瞬間……！

「スーパーマントオッ!!!」

黄色い布が、一直線にきた黒き稲妻を、逆に天に跳ね返した。
黒雲の中に潜り込んだそれは、轟音をたてながら雲の欠片一つさえ残さずに消滅した。

「なんですってっ!？」

「ふう、ギリギリか…」

サーベルレオモンを庇うように、その人物は立っていた。

「…マリオ、だったか？」

「その通り」

何とか起き上がったサーベルレオモンに、マリオはニッコリとほほ笑んだ。

愛用のスーパーマントを使って、攻撃を防いだのだ。

「んうゝ！ また邪魔者があゝ!」

「しかし身体動かしに来てみればまあ…しかし、ドンキーみたいな奴だな」

のんびりと観察しているマリオの背後から、二人分の影が飛び出た。

「シエルブリッドオオオオオッ!」

「リボルバァーッ!」

影の正体は、カズマとスバルだった。

輝くシエルブリッドと、高速でスピナーが回転するリボルバーナックル。

二つの拳を後ろに振り、真正面から突き進む！

「なめんじゃないわよっ！ ダブルナンバーワンパンチッ！」

両腕を振り、勢いよく前に突き出す！

「バアアアアストオオオオオオッ！！！」

「キャノオオオオオッ！！！」

合わせて計四つの拳が衝突しあい、爆発的な風を引き起こした！
それに応じて、床がまるでツララのように盛りあがってゆく！

激しい拳の競い合いが、数秒間に続く。

「「おおおおおおおっ！！！」」

気合の一声を発して前へ突き進むと、遂に変化が訪れた。

「無駄よ無駄… ああ！？」

余裕の態度であつたメタルエテモンに、焦りの混じつた声を上げた。

自身のフルメタルの両拳に、亀裂が入っていったからだ。
それは止まる事はなく、さらに大きなものとなっていく。

「そ、そんな馬鹿なっ！！？」

認めたくない一心で叫んだ瞬間、金属が粉々に砕け散る音が響く。

破壊されたメタルエテモンの両腕が、欠片として飛び散る。

「あ、あちしのクロンデジゾイドのメタルコーティングがあっ！！？」

「今だあっ！！！」

すぐに通り返した二人の後に、間髪いれずに残った全員が飛びかかる！

「ファイア掌底っ！！！」

炎を纏ったマリオの掌底…。

「犬上流・狼牙双掌打ッ！！！」

「スピーア！ シュナイデンッ！！！」

さらに小太郎の気が籠もった拳、エリオのストラダによる斬撃…。絶え間ない攻撃と両腕からきた亀裂によって、ボディにも大きな亀裂が入る。

「そ、そんなあっ！！？ あ、あちしの身体にヒビがあっ！！？」

「終わりだメタルエテモンッ！！ ネイルクラッシュャーッ！！！」

止めの一撃に、鋭利な爪が亀裂の入るボディに炸裂した！

もはや元あった強度の欠片もないクロンデジゾイドに、これは充分過ぎるものだった。

易々と胸部を貫通し、巨大な空洞が出来上がった。

「あ、ああ…！！？」

すかさず爪を引き抜き、後ろへと下がる。
それを気にせずにメタルエテモンは、ただただ自分の胸にできた穴を見ていた。

「こ、こんな…！？ たかが人間と…！ デジモンなんかにあちしが負けるうっ…！？」

足が徐々に黒い粒子となつてゆくにも関わらず、喋り続ける。

「うそでしょおおおおおおおっ…！！！！！！」

その叫びを最後に、全身が黒い粒子となった。

瞬く間にそれは空気中に撒かれ、消えていった…。

「…やったのか？」
「ああ」

元のレオモンの姿となり、返事をする。

「よ、良かった…」
「へっ、大した事ねえサル野郎だったぜ」
「あゝ、首痛い…」

口々に喋りながらバリジャケット、アルターを解除していく。

「さあ、その怪我を治しにマスターンところに行こうか」

「は、はい」

「俺はいい…ねみいから寝る」

寝つ転がって目を閉じ数秒後、イビキをかいて眠りについた。

「ちょ、ちよつとカズマさん!？」

「ね、寝るって…!」

「ほつといたれやハチマキの姉ちゃんどエリオ。いいゆつてんやし」

どうでもよさげに言い、小太郎は両手を頭の後ろで組む。

「で、でも…」

「いいって言ってるんだから、気にせず行こう」

マリオに押される形で、全員が部屋を出て行った…。

「だからエリオはアホなんや! 女にはっかり目がいつとるから!」

「好きな人がいないって、悲しいね…」

「あ、哀れみの目で俺を見るなやつ!」

「まあまあ、二人とも…」

談話しながら怪我を直すべく、マスターのもとへと歩いている中…。

「……………」

腕を組みながら、レオモンが深刻な表情で何かを考えていた。
無論、メタルエテモンの事を。

(…何故、奴は蘇ったんだ?)

前に自分の命と引き換えに、完全に葬ったハズだった。

しかし奴は蘇っていた…どうして蘇ったのか、何故ここにいるのかも分からずに。

「あんまり深く考えないほうがいいよ」

「マリオ…」

考えを察したのか、小さな声でマリオが話しかけてきた。

「マスターに話してから、あいつが現れた原因を考えようぜ」

「…それも、そうだな」

一人で考えても分からないのなら、他の人の考えを聞けばいい。

頭を使うのを止めて、談話をしている小太郎達の会話に参加した。

こうしてマスターのいるであろう場所に、彼等は確実に足を進めるのだった…。

第十一話：復讐のサイボーグ型デジモン（後書き）

第十一話、いかがでしたでしょうか？

今回は試合ではなく、終わった後を書かせて頂きました。
次回も今回と同じにする予定です。

試合をお望みの読者様、どうも申し訳ありません。

ご感想にご指摘、このキャラ同士を戦わせたいという意見もござい
次回もお楽しみに！

第十二話：激闘！ 新登場の選手たち！（前書き）

前回のあとがきに試合ではないと書きましたが、変更させていただきしました。

どうもすみません！

それでは、試合へどうぞ！

第十二話：激闘！ 新登場の選手たち！

「第二十四試合を始める前に！ 新たな参戦者を紹介する！」

「ええっ！？ 俺きいてねえぞお！？」

聞いてもない参戦者に、驚いの仕草をクレイジーはとる。
観客も同じように驚き、騒ぎ出している。

「内緒にしておいたのさ！ さあ、モニターを見てくれ！」

指を擦りあわせて鳴らすと、上空に画面が姿を見せる。
そして焦らすかのように徐々に、参戦者の名前が浮き上がってきた。

『新参戦者・名簿』

「銀魂」

坂田銀時

「ハヤテのごとく」

綾崎ハヤテ

「NAMCO×CAPCOM」

有栖零児

（ロック・ヴォルナットもこの作品へ移行）

「以上の三人！ では早速！ 甘いもの大好き侍！ 白い髪は生まれつきだぜ！ 坂田銀時！」

「パフェくいて」

「丸い体にキュートな瞳！ 言うておくが、カービィじゃない！ プリン！」

「プリン」

銀時は不機嫌そうに、プリンは上機嫌に配置につく。

「では始め！」

「…プリン！？」

始まった瞬間、銀時の目が変わる。

相手の名前が頭に何度も繰り返される。

プリン——時々パフェの上のっている、あの至高の甘い品。今、糖分が決定的に不足している彼にとって、それはとてつもない言葉だった。

「…だああああ——っ！！！」

糖分が足りず、なお且つ好きな甘い物の名に、遂に限界を超えた。いや、理性が崩壊したといっても、過言ではない。

「な、なにぷり…?」

いきなり叫びだした為に、プリンは怯えて動きを止めた。だが、それはやってはいけなかった。

「糖分がつ!」

“洞爺湖”と柄に掘られた木刀を構える。彼の考えは一つ。

瞬殺して糖分をとること。それだけだった。

「足りないんだけどおおおおっ!!!」

木で出来ているにも拘らず、真剣を上回る強度や硬度を誇る木刀。それを薙ぎ払うかのように強く振った。

まともに叩きつけられたプリンは、ただで済むわけがない。悲鳴すら上げる間もなく、場外へとホームランの如く、吹き飛んでいった。

「…場外。勝者、坂田銀「おい軍手さんよろしく! 食堂どこだ!?!」
「え…? あ、あっちだが?」

言葉を遮ったのに動揺するが、すぐに食堂の場所を指さす。すかさず指さすその先へと、銀時は駆け出していった。

対決の結果だとかは、どうでもいいようだ。とにかく糖分優先なのだ。

「…なんだ、あいつ？」

クレイジーの言葉に、誰もが納得する。気を取り直し、マスターは再び宣言する。

「…と、とにかく。勝者、坂田銀時！」

「気を取り直して第二十五試合！ 不幸でも健気に生きる！ 身体能力ありえない執事！ 綾崎ハヤテ！」
「まさかあの手紙、ホントだったとは…」

「ケロロ小隊の隊長！ ガンプラと掃除なら負ける気ゼロ！ ケロロ！」

「ゲェロリッ！」

配置につき、二人は身構える。

「では初め！」

「さあ、どこからでもかかってくるであります!」

開始と共に、隙だらけの構えをケロロは取る。

この余裕の態度には、もちろん訳がある。

(ゲロゲロリ! あの貧弱そうな感じ! どう考えても勝ちはず輩
のものであります!)

見た目、相手は普通の若い執事。

自分の知っている老いた執事ほどの強さはないだろう。

そう多寡をくくっていたのである。

だが、普通の執事がこの大会に呼ばれる筈がない——という考えは
なかった。

「そうですか? では、お言葉に甘えさせてもらいます」

ニツコリとほほ笑み、彼は動いた。

普通の執事ではありえない速度で。

「ゲロツ!」

呆気にとられる間もなく、腹部に強い衝撃が起こる。

蹴られたと気づくのに、数秒ばかりの時間がかかった。

「続いていきます！」

攻撃は止むことはない。

ひ弱そうな外見には似合わない程に速く、重い蹴りを連続で放つ。半ば意識が失われつつあるケロロは、何度も蹴られた反動によって宙を舞う。

「もらいます！」

どこから取り出したのか、それは両手でやっと持てる重量をもつ、MG42機関銃だった。

彼は汗一つかかずに、片手で平然とこれを持っているのだ。

重力に従い落下するケロロに、しっかりと狙いを定め――。

トリガーを引いた。

「っ！？？！？！？」

けたたましい音を出す銃声が、フィールド中に響いた。

容赦なく何発もの弾丸が撃ちだされ、空薬きょうが排出される。

絶え間なく襲い来る痛みには耐えられる筈もなく、ケロロの意識は飛んだ――。

「…勝者、綾崎ハヤテ！」

「ふう、意外といけました」

フィールドには、左手で銃を持ち、右腕で汗を拭く仕草をするハヤテ。

そして、痣だらけになって気絶しているケロロの姿があった。

敗因があるとするならば、答えは簡単。

それは油断であることを会場の誰もが理解できた…。

「第二十六試合！ 妖魔を滅ぼす組織のエース！ 世界の危機を救った男！ 有栖零児！」

「俺の番か」

「対するは、宿屋を経営する双子の兄！ 妹と共に今日もいく！ ライ！」

「よしっ！」

配置につき、有栖は腰に手を、ライは剣を手にする。

「では…初め！」

開始直後、有栖は腰に差してある金色の六連式銃を手取る。狙いをつけ、トリガーを引いた。

「ゴールド金！！！」

金色の六連式銃、“金”^{ゴールド}を弾切れになるまで撃ち続ける。
見た目通りの名前ではあるが、弾一発の威力は計り知れない。

「ぐっ！！？」

咄嗟に剣を盾代わりにして何発かは防ぐ。

しかし曝け出されていた足や腕に、一発ずつ銃弾が撃ちこまれた。

「つてえ！！」

尋常ではない痛みによって、体制が大きく崩れた。
絶好のチャンス、それを逃しはしなかった。

「もらった！」

二本の鞘に収められている二本の刀、“火燐”^{かりん}と“地禮”^{ちらい}を抜く。
左右の手でしっかり握り、走って近づくと同時に斬りかかった！

「っ！？」

無論、ライもただやられる訳もない。

先に振られた火燐を弾き、続いてきた地禮を受け止める。

「このまま押し返して…！？」

力を入れて押し返そうとした途端、一発の銃声が轟いた。

直後、剣がフィールドに突き刺さった。

さらに持ち主のライが、後方へと吹き飛んでいた。

ハリウッド
「柊樹…！」

銃口から煙を上げるショットガン、“柊樹”^{ハリウッド}の銃身を下ろす。
観客は何が起こったのか、さっぱり分からない様子だった。

火燐を弾かれた有栖は、すぐにそれを投げ捨てた。

代わりに背中にある柊樹^{ハリウッド}を手にし、至近距離で撃ったのだ。

高い威力の弾丸を全て至近距離で受けたライが、起き上がれる筈もない。

「…気絶を確認。勝者、有栖零児！」

「結果は重畳^{ウツタツ}…か」

勝利宣言の受けると、有栖は観客席へ戻っていった…。

——休憩室

「…ってわけ」

「なるほど。蘇った敵、か…」

一方、先ほど復活した敵のことを、代表でマリオが詳しく話していた。

二十六試合が終わった直後に呼ばれたマスターは、時折うなづきながら事情を聞いた。

「原因は分らんが、まあこっちでも調べてみる」

「頼むよマスター…また、ヤバイ事件でも起こるのか？」

真剣な表情に、マスターは唸りつつ考え…。

「さあな…ただ、これが何かの前兆というのは、確かなのだろうな」

沈黙が、誰もいない休憩室で起こる。

この大会、ただで終わらないのは、二人には目に見えているのだった…。

第十二話：激闘！ 新登場の選手たち！（後書き）

第十二話、いかがでしたでしょうか？

そして二ヶ月も待たせてしまい、申し訳ありませんでした！

テストなどで時間が想像以上にかかってしまいました…うう、すいません。

次回はもっと早くに出来るよう、精進いたします！

ご感想、ご意見、ご希望がございましたら、いつでもどうぞ！

第十三話：二十七、二十九試合 猫達の大乱闘！（前書き）

新たな参戦者達が戦いを繰り広げた前回。
今回は…ネコ達？

第十三話：二十七、二十九試合 猫達の大乱闘！

「第二十七試合！ 普通の猫なのに二本脚で歩く！ このブーメランが見えるか！？ マタタビ！」
「拙者の番か…」

「続いて… コンビネーションはピカイチ！ 共にハンマー振り回す！ アイススクライマー！」
「行くわよポポ！」
「うん！ ナナ！」

すぐに指定の位置に立ち、睨みあいが始まる。

「構えっ！」
「二対一でも、勝ちようはある」
「あんたみたいな猫、ボコボコにしてやるわ！」
「油断はしない様につ、と」

「始めっ！」

「とつととかかってこい、女」
いきなり、マタタビは挑発し始めた。
これは二対一という状況を変え、一対一に持ち込もうという考えだった。

「このお！」

「ナナ！？ 待って！ まずは様子を…！」

見事なまでにナナは、まんまと引っ掛かった。

静止する声に構わず、怒るナナは持っている愛用のハンマーを構えながら走る。

それを正面にいるマタビに力一杯、縦に振り下ろした！

しかしすぐに、ナナは冷静になる。

マントの下から取り出したチェンソーで、ハンマーを受け止められた事で。

「なっ！？」

「甘い！ 拙者のマントの下には大量の武器があるのだ！」

喋っている間にも、高速でチェンソーは休むことなく回転を続ける。耐えきれず、ハンマーの頭は徐々に削られ、木片と化していく。

「ナナっ！？ 今助けに！」

「させんっ！」

援護に向かおうとするポポを、マタビが許すはずもなかった。持ち手から放せる右手をマントに突っ込み、懷から手裏剣を五枚をとりだす。

振りかぶり、勢いよく投げつける！

「うわっ！？」

数歩前に突き刺さった手裏剣に気を取られ、思わず足が止まった。その間にハンマーは回転する刃に耐え切れずに、頭が真つ二つに切り裂けた。

「あつ!?!」

愛用のハンマーが切り裂かれた事に、ナナは呆然とするしかなかった。

真つ二つに別れたハンマーの頭が、重い音をたててフィールドに落ちた。

「はあああああつ!?!」

すかさずバットを取り出すと縦に構える。力一杯まで溜め、そして。

「ホームラアアアンツ!?!」

叫びと共にバットがナナの腹部にめり込む。声すら上げる事も、敵わない。

そのまま野球ボールのように、場外へと大きく吹き飛んでいった。

「ナナあああああつ!?!?!」

「悲しんでいる暇など…」

瞬時に叫ぶポポの背後に回り、愛用の“ステルスブーメラン”を掲げる。

あまりの速さに、気付けなかった。

「ない！」

「っ！？」

強力なブーメランを、首の後ろに直撃させる。

凄まじい衝撃が、首から全身に伝わる。

呆気なくポポの意識は遠のいていった…。

「勝者、マタタビ！」

「終わったか…」

ステルスブーメランをしまうと、マントが風でたなびいた…。

「第二十八試合！ メタリックな身体の持ち主！ 猫だからって侮るな！ ミー！」

「おっ、僕の出番だぁー」

「続いて、小さな体に膨大な電気！ 代表的なポケモン！ ピカチュウ！」

「ピカア！」

指定位置に立つと、二匹は構えを取る。

「構え！」

「いくぞ！」

「ピカッ！」

「始めっ！」

「ピイカアチュー！」

始まった途端、ピカチューは手始めに電気の球を発生させる。山の形に地面を伝っていき、ミーへと進む。

「そんなの当たらないよつと！」

地面を強く蹴り、高く跳んでかわす。

空中で胸部の装甲を開き、ガトリングを取り出す。

「喰らえっ！」

着地と同時に、狙いを定めたガトリングを撃ち出した。

回転しつつ、銃弾が連続で飛び出る！

「ピカッ！」

だが突如、目の前にいた筈のピカチューの姿が弾の軌道状から消えた。

弾丸は虚しく、地面にめり込んだ。

「なにつ!？」

高速で移動する事が出来る技、“でんこうせっか”。
追いつける速度ではない。

多少は動きが見えるものの、なかなか攻撃できる隙が見当たらない。

「くっ!」

周りを何度も動きまわり、どうにも狙いが定まらない。
ならば。

「でやあああああ!！」

ガトリングを投げ捨て、なんでも切れる剣を水平に構える。
そしてピカチュウが次に来るであろう地点へ跳ぶ。

「っ!？」

先回りされた事に気付くが、遅い。
身体はすでにその地点へと動いている。

「もらったあ!」

鋭い剣が、振り下ろされた。
これで斬れば、勝てる。

その考えは一筋の雷光によって消滅した…。

閃光が収まったフィールドには、黒焦げとなったミーが、煙を出していた。

その目の前に、ピカチュウで無傷で立っていた。

斬りかかってきた瞬間、ピカチュウは一か八かの賭けに出た。

それは最大の力で、“かみなり”をミーに目掛けて落とすことだった。

もう少しかみなりが遅れていたら、負けていたのはこっちだろう。

「勝者、ピカチュウ！」

「ピカ〜…」

安心したのかタメ息をつき、控え室へと去っていった…。

「第二十九試合！ 青き身体に丸いの手！ ダルマじゃないぜ！」

ドラえもん！」

「微妙な紹介だな…」

「続いて、暑苦しさナンバー1！ 速さはナンバー2！ キャプテン・ファルコン！」

「ム力つくぞ紹介！」

納得のいかない顔で、二人は立ち位置につく。

「それじゃ…始め!」

「クレイジー! テメエに俺の速さを見せてやらあ!」

紹介が気に食わないファルコンは、まずそれが優先だった。
ナンバー2ではなく、一番である事を示す為に。

「おおおおおおおっ!!」

気合いをいれ、全速力で走りだす。

スマブラの中で二番というだけあり、確かに速かった。

ドラえもんの視覚では、到底確認できないほどに。

「は、速い!? ど、どこ!?」

音で分かる事は、周りを走っている事ぐらい。

腕を組み、何かこの速さの対処方法はないかと急いで考える。
だが焦るばかりで、何も思いつかない。

「どどど、どうしよう!!!?」

「ワリいが、もらったぜ!」

あたふたとするドラえもんに、一直線に駆けよる!

力を溜めていたファルコンの右拳が、炎に包まれる。

「ファルコオオオンッ！　パアアアアンチッ！！」

真っ直ぐに向かってくるファルコンに、がむしゃらにポケットに手
を突っ込む。

だが出てくるのはガラクタばかりで、役立つものはない。

すると、使い慣れたあるひみつ道具を、幸運にも手に取れた。

「…っ、これじゃ……」

しかし戦闘向きではないこの道具に、頭を悩ませる。
だが敵はもう目の前、やるしかない。

「どこでもドア〜！」

迫りくるファルコンの目の前に置き、すぐに開く。
勢いに、調子にのっていた為、止まる事も出来ない。

そのまま吸い込まれるように潜っていく。

「…あれ？」

気付けば、ファルコンは場外に出ていた。

ドラえもんは咄嗟に、場外に通じる様にしておいたのだ。

「な…ああああああっ！！！！！」

ジタバタするが、時すでに遅し。
呆気なく、ファルコンは落ちていくのであった…。

「…しよ、勝者、ドラえもん」
「…勝てちゃった」

なんとも、虚しい決着だった…。

第十三話：二十七、二十九試合 猫達の大乱闘！（後書き）

大変遅れてしまい、どうも申し訳ありません！

書く時間があまり見つけられず…。

これから、なんとか早めに書きたいと思います。

第十四話：三十、三十二試合 ゲームとアニメの混合戦2（前書き）

猫達の大乱闘があつた前回。

さて、今回は…？

第十四話：三十〃三十二試合 ゲームとアニメの混合戦2

「第三十試合！ 気ままに旅する伝説の風来人！ シレン！」
「伝説、ねえ…」

「続いては、自称ププランドの王！ 図体デカイし態度もデカイ！ デデデ！」
「うるさい！」

「構え！」
「よろしくお願いします」
「んじゃ、やりますか」

「始め！」

「とつとと終わらせるか…」
「お前の負けでな！」

一気にデデデは飛び込み、そのまま突っ込む。
足元にシレンが何かを置いていたが、特に疑問に思わなかった。

愛用のハンマーを振りかざし…。

「喰らええ！」

勢いよく叩きおろした。

口々に防御もしていない頭に。

頭蓋骨が粉々に砕けるかの衝撃が、シレンの頭部に…。

「…わりいな」

「な、なにい！？」

伝わらなかった。

痛がるどころか吹き飛ぶこともなく、シレンはただ立っていた。
姿勢も変わっておらず、タンコブ一つも出来ていない。

驚くには、充分すぎた。

「まあ、こいつのお陰だな」

薄らと笑いながら、シレンはさっき地面に置いたある物に目を向けた。

“聖域の巻物”。

広げて地面に置き、その上に立つことで攻撃を全て無効にする巻物。

この効果は、攻撃を完全に防いでくれたのだ。

「残念だったな、あんた」

懷に差してある鞘から、シレンは“秘剣カブラステギ”を抜く。

水晶の様な形に、眩い輝きを醸し出す刃…。

それは観客の目を奪うには、充分すぎた。

容赦なく、叩きつける様に振り下ろした！

「ぐはっ！！？」

シレンの世界において最強の威力を誇る、秘剣カブラステギの威力は凄まじかった。

たった一斬りで、気絶させる程に。

「…勝者、シレン！」

「まっ、こんなもんだろ」

「第三十一試合！ 子供だけど宿屋の主！ 今日も兄と頑張るぜ！

フェア！」

「よぉーしっ！」

「続いては…リンクと似てるが違っ！でも子供リンクでもないぜ！
トゥーンリンク！」

「…何だよ、その紹介」

陽気のフェアとは逆に、ガツクリとうな垂れながらトゥーンリンクは指定の位置に立つ。

「構えっ！」

「行くわよー！」

「…まっ、頑張ろう」

「始めっ！」

「まずは慎重につと！」

手始めに爆弾を懐から取り出すと、勢いよく投げる。
導火線はもう、全て火に包まれそうだった。

「っ！」

その場をフェアが横に跳びと同時に、爆弾が先ほどまでの場所を通り過ぎていった。

後方で爆発音が発生する中、トゥーンリンクが剣を手に駆けだしていく。

「てやつ！」

「きゃっ!？」

すぐさま屈み、横に振られた剣をかわす。

だが一息つく間もなく、今度は一直線に剣が下ろされる！

「っ！」

腰に差しであつた短剣を素早く抜き、明後日の方向に剣を弾く。

衝撃でフラつくトゥーンリンクを尻目に、立ち上がって後ろに下がる。

チャンスと言わんばかりの状況に、フェアは懷から緑色の宝石の様な物を取り出す。

「来てッ！ ナックルキティ！」

手の中にある宝石、“サモナイト石”が光り輝く。

石の中から現れたのは、二本脚で立つグローブをした猫だった。ピョンピョンと跳ねる仕草と見た目で、猫のヤル気がうかがえる。

「本気でお願い！」

「ニャー♪」

ニッコリとフェアに微笑みかけ、お願いを聞く。

そして、フラつきが治ったトゥーンリンクを睨んだ。

「ニャーッ！」

一気にトゥーンリンクに目掛けて跳ぶ。
瞳に映る闘志は、並大抵のものではない。

「っ！？ ブーメラッ！」

咄嗟に腰に差しであったブーメランを引っ掴む。
狙いを定め、勢いよく飛ばした。

「ニャー！！！」

だがその場を跳んだナックルキティには、かすることもなかった。
虚しくも、ブーメランはそのまま通り過ぎて行く。

その間に着地し、トゥーンリンクの懐に入り込めた。

「しまっ！！？」

一発。

二発三発四発！

高速のジャブが、身体中を打ちまくる。

最後に、止めの一発をアッパーとして、顎に叩き込んだ！

すると役目を果たしたためだろう。

ナックルキティは光に包まれると、跡形もなく消えていた。

「……………」

痣やらタンコブが、トゥーンリンクの身体中に出来あがっていた。

ダメージは相当な様子で、倒れたまま動かなかった。

「…勝者、フェア！」

「勝ったー！」

「第三十二試合！ 魔界の王！ 見た目とは裏腹に千歳超えてる！
ラハール！」

「見た目とは裏腹につて、どういう意味だぁー！！！！！」

「続いて、腹黒タヌキと人は呼ぶ！ セクハラすんなよ？ 八神は
やて！」

「なんやその紹介はー！！？」

明らかに嫌がらせとしか思えない紹介…。
それに怒りながらも、指定の位置につく。

「構え」

「とつと終わらせてくれるわぁ！」

「舐めんといてや！」

「始めえ！」

「いくで！ …とその前に」

バリアジャケットを展開しようと、愛用のデバイスに手を伸ばす。怒りに忘れて、装着していなかったのである。

しかし、それが勝負の運命を大きく変えた。

「うおらああああっ！！！」
「へっ！？」

悪魔であるラハールが、そんなものを待つ訳が無かった。宣言通り、速攻で終わらせるつもりなのだから。

彼の走りはバリアジャケットを展開するよりも速いと、一目で分かった。

「ちょちょ、ちょっとま——！？」
「ふんっ！」

悲痛な叫びを気にも留めずに、はやての腹に拳を向かわせる。

因みに、はやて達はバリアジャケットを展開しない限り、ただの女性。

展開しなければ魔導師にはなれず、一般人と殆ど大差ないのだ。

そんな状態で、魔王の拳を喰らえばどうなるか？

「うつっ！？」

答えは単純。

手加減されているとはいえ、一般人が耐えられる訳がない。あつという間に、意識を手放すこととなった…。

「…は？」

「勝者、ラハール！」

「「「「ええええええええええっ！！！！？」」「」「」」

観客の驚きとブーイングの混じった声が、会場に響く。

ラハール自身も、これで終わるなどと思っていなかったのだろう。呆然として、気絶しているはやてを見ている。

「ラハール。その子はバリアジャケットと言うものを展開しなければ、ただの人間なんだ」

「…そういう事は、早く言え」

不満気に言うと、そのまま控え室へと向かう。

納得できない結末だが、終わってしまったては仕方がない。

「一応、言っておけば良かった…」

タメ息をつきながら、マスターは思う。

そしてすぐに、観客を宥めるのだった…。

第十四話：三十〜三十二試合 ゲームとアニメの混合戦2（後書き）

またも遅れてしまい、申し訳ありません！
最近は忙しかったもので…。

もう片方のものは休載という形でお願いします…。
本当に申し訳ありませんでした！

ご感想、ご意見をお待ちいたします！

第十五話：激戦の三試合（前書き）

様々な者達が戦った前回。

今回は三人のスマブラメンバーが、三人の選手と対決…。

第十五話：激戦の三試合

「第三十三試合！ 仮面とマントに身を包む騎士！ 剣の腕はプ
ブランドー！ メタナイト！」

「…私の番か」

「続いて…レアスキルの持ち主！ 飛び蹴りは強力だ！ 神楽坂
明日菜！」

「なによその紹介！？」

文句を言いつつ、明日菜は位置につく。

一方のメタナイトは、無言のままだった。

「構え！ 始めッ！」

「いつくわよおおッ！！！」

「…」

ハマノツルギを構え、すかさず駆け出した。

一般人とは思えない程の速さで。

「喰らいなさい！」

自分の膝にも届かないメタナイトに、勢いよく振り下ろした。
避けなければ、明らかに直撃コースだ。

それなのにメタナイトはあろう事か、剣を抜く素振りすら見せてい
なかった。

ただ一つだけした事といえば、マントで己の身を覆い隠すだけであつた。

しかしその行動が、明日菜にとって思いもよらない事態を招いた。

「へっ!？」

間の抜けた声が、明日菜の口から洩れた。

さらに立ち止りをしたのも、無理もない話だった。

突然、メタナイトの姿が陽炎の如く、消えたのだから。

「ど、何処——!」

捜そうと辺りを見回そうと首を動かそうとした。

「ッ!？」

だがその前に、気配を感じて後ろへと振り向いた。
彼女の眼に映った物、それは…。

仮面をつけた青い球体…メタナイトが、そこにいた。
ディメンジョンマントを用いて、移動をしていたのだ。

そんな事を露にも知らない明日菜は、いつ背後に回っていたのか、
などと考える暇などはない。

すかさず、ハマノツルギを構え直した。

だがそれは、あまりにも遅すぎた。

「もらった！」

一足早く、ギャラクシアが彼女を切り裂いた。
それも一回だけなどではない。

二回三回四回と…。

目に見えないほどの速さで、何度も切り刻んでいく。

「が…はあ……！」

一発一発が重い斬撃に、為す術など無い。
身体中から来る痛みには耐えきれず、倒れていった…。

「勝者、メタナイト！」

「これも宿命だ…！」

マントをたなびかせ、ギャラクシアを鞘に収めるのだった…。

「第三十四試合！ 潜入のプロ！ ダンボールは愛するべし！ ス
ネーク！」

「ショータイムだ」

「続いて、ディグアウトはお手の物！ 右腕を使い、今日も行く！
ロック・ヴォルナット！」

「さあ、頑張ろう！」

ほぼ同時に定位置につくと、構えを取る。

「始めえッ！」

「ふんっ！」

始まった途端、スネークは手榴弾を投げた。

それはロツクに向けたものではなく、地面に向かってだ。

無論、爆発の威力は届く事はなかった。

だが爆風と煙は別で、彼の場所に流されていく。

「ま、前が見えない！」

煙は視界を遮り、風は一瞬だけ動かせなくした。

しかしそれらも時が過ぎれば、何事もなかったかのように消え失せる。

「よしッ！」

いったん後ろに下がり、後方から射撃をしようと考えた。

しかし――。

「うわあっ！！？」

それは突然、地面が爆発した事で叶わないものとなった。彼が踏んだその場所には、ある物が埋められていたのだから。

地雷と言う、スネークが所有する爆弾が。

「ぐはッ！！？」

さらに歴戦の兵士である彼が、一つだけ仕掛ける…。
そんなことで、終わるわけがない。

後ろに足を動かした途端、またも地面が吹き飛んだ。

「がぁあッ！！？」

踏めば踏むほど、ロックの体力は激減していく。

あの間にこれだけ埋められるのは、さすがと言つべきなのだろう。

しかしそれでも諦めず、そして倒れずにバスターを構える。

「ぐ…！ ど、何処だ？！」

ところが、スネークの姿が、フィールドの何処にもいない。
周囲を見渡しても、気配すら感じられないのだ。

「これで、終わりだ」

「ッ！？」

後ろから聞こえた声に驚きつつ、すぐに振りむいた。

そこには重火器であるRPG-7が、宙に浮く形でその場にあった。

「なッ！？ ぐぁあぁあッ！！！！？」

即座に弾丸が射出され、ロックに直撃した。
避ける間など、ありはしなかった。

地面に何度もバウンドし、止まる頃には意識はなかった。

「…気絶を確認。勝者、スネーク！」
「作戦勝ち…というものだ」

優雅にステルス迷彩を解除し、煙草に火をつけるのだった…。

「第三十五試合！ 見た目は古い！ でも中身は凄いぞ！ ロボット！」

「見タ目ハ余計デス」

「続いて、亜鉛合金のボディ！ 無敵の勇姿！ カンタムロボ！」
「いくぞ！」

「ビーム！」

何を思ったのか、勢いよく顔を前に突き出す。
すると全てを見通すような両目から、光線が射出された。

「そんなもの！」

しかしそんなもので、無敵のロボットであるカンタムには効きはない。

両腕を交差させ、容易く光線を耐えきって見せた。

「今度はこっちの番だ！」

おもむろに背中へ手を伸ばすと、大空へ舞う為のウィングを取り外す。

すかさずそれを、目の前にいるロボットへ投げつける。

「オットオツ！」

だが旧型であろうとも強力な兵器であるロボットに、それは当たりはしない。

紙一重で避けると同時に、一気にカンタムの懐へ入る。

「回シ蹴リデス！」

「ぐッ！？」

さすがに亜鉛合金と言えども、フルパワーの蹴りは少々酷であった。足が地についた状態で、後ろへと吹き飛んでいく。

「っ、強い…！」

今の一撃で強さが分かったのだろうか。

人間でない彼が、冷や汗が流れる様な錯覚を感じた。

「カンタム、がんばれーッ！」

だがそんな彼に、心優しき五歳児の声援。

応援は、カンタムの心を震わせるのに充分だった。

「……！　ありがとう、しんのすけ君！　たあッ……！」

すぐさま体勢を立て直し、両腕を突き出す。

すると徐々に腕が肘から離れていき、点火していく。

「カンタムッ！　パーンチッ……！！」

彼が持つ、最強の技。

幾多もの敵を倒してきた、拳が撃ち出された。

「ッ……！」

迫りくる拳に、ロボットは迎え撃つ構えを取る。

自身のアームを猛回転させ、前にでる。

そして、接触した――。

「……?!?!?!?!?!」

二つの内、一つは見事に弾く事が出来た。

しかし、もう一つの拳はそうはいかなかった。

アームから逃れた拳は、ロボットの顔面に炸裂したのだ。
もともと大した装甲でない彼には、充分なものであった。

「ッ……?!?!?!?!?!」

止めの一撃のように、戻ってきたウイングが背中に突き刺さる。

放電し始めると、猛回転をするアームが止まり、力なく垂れ下がった。

「機能停止を確認…勝者、カンタムロボ！」

「しんのすけくんのお陰だな…」

腕とウイングを戻し、観客席へと歩んでいく。
行き先は無論、しんのすけのもとであった…。

第十五話：激戦の三試合（後書き）

遅くなり！ 大変申し訳ありません！！！！

そのうえ文章も短く、試合もほとんど進まず…！

次回はもっと早くに更新出来るよう、心がけます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6551f/>

大乱闘! ゲーム&アニメ! 夢の大バトル!

2010年10月8日21時53分発行